魔法世界の異能持ち

稗田阿灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法世界の異能持ち

【Ｎコード】
Ｎ０１３８Ｗ

【作者名】
稗田阿灯

【あらすじ】
娯楽に飢えた神々は、アニメマンガの世界に一般人を転生させ戦わせることを思いついた。
殺すか殺されるかの戦いに生き残った者には報奨を与えるという条件付きで。
原作ブレイクを狙うもの、ハッピーエンドを望むもの、全てを壊すもの…。
さまざまな人物が集まるなか、一人の青年が転生する。
原作を知らない彼は、いったいこの世界でどのような物語を歩むの

だろうかーー。

※処女作です。誤字脱字が含まれるおそれがあります。それでもいいというお方は、どうぞお読み下さい。

かってないプロローグ（前書き）

どーもはじめまして。
作者です。

とりあえず気軽に読んで下さい。

かってないプロローグ

転生。

それは恐らくほとんどの人が望む事。
一部の人々は、特殊な能力を得たり、不老不死をついでに願う。
来世に期待するのは正直どうかと思うが、そんなの個人の自由だ。

だがよく考えてみて欲しい。
転生をしたとして、その後の人生がどうなるか。
安易に考えていると大変な目に逢う。

俺自身適当に思っていた。
「もし転生なんかしたら無双してぇなぁー」みたいに。
「神様、俺を転生させて下さい！」とか。

もちろん、死ぬ覚悟がある訳でも無く、
あるわけないと内心諦めつつ日々を過ごしていた。
それが後々どういう結果をもたらすのかなんて知るはずがないまま。
忘れてたんだよ、確率は0じゃないし誰にでも
起こりうる事だったんだって。

ふぅ。
そろそろ過去の事を思うのは止めよう。
現実逃避にしかならないしな。
過去より未来を見ようって誰かが言っていた気もする。

…うん。ここらで察しのいい人はわかってくれると思う。

俺はなんと転生した！

だって足元に「転生乙」って書いてあるメモが置いてあるから。
うん悪質だね。どうみても誘拐です本当にありがとうございました。

まあ仮に転生したと信じたとして、それはそれで嬉しいだろう普通は。
だけど、素直に喜べない俺。
なんでかって？
普通はさ、なんかで死んで、変な空間行って、神様に会って、
能力貰って、で俺ツエー、でしょうよ。

でも俺はなんの事故も現象も無く、気付いたら転生してた。
まあいいよ。本当に転生出来たのならこれ程嬉しい事はないからな。
だけどひとつ言わせて。
基本的に流されるように生きてきた俺だけどさ、
これだけは言いたい。
右、見渡す限りの森。
左、見渡す限りの森。

…ここ…どこ？

かってないプロローグ（後書き）

感想もろもろある場合は、
できるだけ優しくお願いします。

その１　難易度はｖｅｒｙ　ｈａｒｄ（前書き）

主人公はシリアスとギャグの切り替えがはっきりしています。
急に変わっても驚かないでね。

その1　難易度はｖｅｒｙ ｈａｒｄ

さて、転生したはいいが何故か森の中にいる俺。

困ったとかっていうレベルじゃない。
むしろ命の危機を感じる。主に餓死的な意味で。
見渡す限り、周りに木の実の付いている樹は発見出来ず、
更に言うなら水の流れる音もしない。
環境が整ってるのならしばらく居てもいいななんて思ってたけど、
何も無いんじゃ仕方ない。
俺はどこかに何かあると信じて進む事にした。

ここで登場するのがそこら辺で拾った木の棒。
みんなやらない？　迷った時には棒を倒して道決めるアレ。
意外にバカにできないんだよなー。的中率の高さが異常だから。

で、早速棒を倒す。
お？　南西か↑適当
じゃあ進みますかね。気分は密林の探検家。インディー・ジョーンズだね。

ふざけた事を考えていたら、いつの間にか暗い気持ちが晴れていた。
そうしたら、足取りが少し軽くなるような錯覚。
なんだか、うまくいく気がした。

時間にして一時間ほどだろうか。
ひたすらに歩いたが、何も見つからない。
それどころか動物の痕跡すらない。
そして地面が腐葉土らしきもののはずなのに、感触は鉱物的。

おかしい。もしかして俺が最初に思った「ここは異世界か」という直感も、
このおかしな場所のせいなのかもしれない。
ファンタジーの様な話しになるが、結界でも張られているのか。

思考のスイッチを真面目な方に切り替えた。

思考しながら歩みは止めない。
今は少しでもいいから情報が欲しい。
凡人の脳で今起きている事を理解するには圧倒的に鍵が足りない。
誰かに頼りたいと心から思う。せめて他に一人でもいれば違ったのかもわからないが。

気付いたら、開けた場所に来ていた。
ここだけ土が綺麗にならされている。
大きさはたった数メートルだが、コンパスでも使ったかの様に丸い円のかたち。

そう、例えるならば、【ヘリコプターが着陸できる】サイズ。

石ひとつ無い所に不自然な楕円形の石。
かかとで踏むと、カチッと、明らかに人工物の音。
押した直後に響く地響き、舞い上がる土や砂ぼこり。
自然の煙幕が晴れるとそこにあるのは、Hと大きく描かれた鋼の地面。

横にあるのは深い闇へ続く階段。

「…そういう事か。」

口元が無意識に弧を描く。
心臓の鼓動が早まる。
嗚呼。ようやく、ようやく確信できた。
ここはやはり自分の知らない世界で、そして俺は主人公。
これから、始まるのか。
二度目の人生が。

その１　難易度はｖｅｒｙ　ｈａｒｄ（後書き）

原作までが遠い（泣）
５話までにいけるといいんだけど…。

その2　俺、孤独、研究所にて（前書き）

独自設定有り。
ごめーんね

その2　俺、孤独、研究所にて

地下へ続く階段を降りていく。
手すりと踊り場には照明がついているが、
ほとんどは割れ、残ったものも激しく点滅し、照明としての機能を半ば放棄していた。
明かりが無いから周囲が見え辛いのに加え、ガラスが散乱しているので非常に危ない。
履いているスニーカーにガラスが刺さらないように危なっかしく進む。
体感で十階程降りた頃だろうか、大きなフロアに出た。
ちょっとした体育館くらいか。

「ここだけ明るいな…。自家発電か？」

暗い中進んで来たあとに急に眩しい場所に出たので、
しばらく目が見えない。
目を慣れさせながら恐らく扉があるのだろう方向に進むと、
思ってもみない光景が広がっていた。

そこには、もともと大きな金庫の扉のように堅牢な門があった。
侵入者をこの地より遠ざけ、研究員を敵対するモノから守る役割をもち、
俺のもといた世界のいかなる技術でも破れぬ鉄壁の守護。
それが、無残に、とてつもなくあっさり、破壊されている。
破城槌でも打ち込まれたか、中心に巨大な穴。
少ないとも俺は、こんなに大きな直径を持つ兵器や武器、その他物体を
見たことが無い。

ここで一体何が起きた！？
なんか、頭がこんがらがる。

とにかく、先へ進まない事には何もわからないので穴から研究所内部へ。
幸い穴はジャンプすればなんとか届く高さだった。
淵に手をかけて、そこから己の腕力でよじ登り、そのまま向こうへ行った。

中を見て絶句した。

至るところに焼け焦げた跡が残り、まるでぶち模様だ。
床や天井には切り裂かれた様な傷、近くに黒ずみ固体化した何か。
ここが広いためそんなに多くは感じないが、数十はある白骨化した死体。

俺はここで戦争でもあったのかと考えていた。
だが、もうそんなレベルの出来事ではなかった。
大きな、死人がでる程の争い。
研究所。
死体は白衣を纏ったものばかり。
その側にあった刀剣の類いや鈍器。
ここまでくれば答えはひとつ。

粛正、削除、排除。
様々な言葉があるが、結局は同じ意味。
虐殺だ。
禁忌を犯したか、親に逆らったか。
どっちだっていいが、つまるところこの場所で誰にとっての都合の悪い

研究をしていて、消された。
「なんだよ…これ…。こんなのが許されるのかよ！！
何もかも殺しやがって！　畜生！」
あまりの怒りに冷静な判断ができなくなりそこら辺の壁を蹴りつけた。
すると足元にあった機械も一緒に蹴ってしまったようで、
少し離れた所へガンガン音をたてて転がった。
携帯に似ているそれは、蹴られた衝撃でスイッチが入ったのか
電子音が鳴りしばらくした後画面から光が出た。
光は空中に留まり長方形のカタチで固定され、実体を持たないディスプレイが出来上がった。
直後映像が再生された。
『……。
…
…
「こちら…第４４管理外世界研究所…
誰か…このメッセージを聞いていたら頼みがある…
すまない…時間が無いから簡潔に話す…
この研究所の、このデバイスがある場所の近くの壁に、隠し通路がある
その先にある武器を管理局の目に届かない世界に運んで欲しい…
絶対に管理局にだけは渡すわけにはいかない
なんなら、君が持っていてもいい
だが気をつけてくれ
所持には相応の覚悟が必要だ…最悪死もありえる……
だが、必ず君の力になるだろう

押し付けてしまって申し訳ない
頼んだ…』

映像には、初老の男性が、鬼気迫る表情でこちらに頼みを言ってきた。
背後から悲鳴や爆発音が聞こえた。
恐らくは襲撃中のもの。
自分たちはもう終わりだ、だから代わりに頼む、そんな思いが分かった。
できればあの男性には生きていて欲しいが難しいだろう。
文字通り命を賭けた頼み。
なら無視する事はできない。
目の前の壁をおもいっきり蹴りつけ薄い壁を崩す。
そうするとやはり通路があった。
埃すらない床は、まだだれも通ったことが無いというのを教えてくれた。
よかった。
ほっと安堵する。

管理局が何かはわからない。
ただ、こんな事する組織なのだから相当な悪なのか。
なら、いやなおさら渡す事はできない。
いざ、と一歩一歩進んで行った。

その2　俺、孤独、研究所にて（後書き）

少しずつ長く書けるようになってきた。
嬉しいなぁ。

あと、ヒロイン募集中です。
敵味方問わず。時期問わず。
お待ちしております。

※更新一旦停止のお知らせ※（前書き）

本当にすいません。（＜＿＞）

※更新一旦停止のお知らせ※

文化祭で忙しいとかってレベルじゃないので、
9月9日まで更新を停止させて頂きます。
本当に申し訳ございません。

次話は多少多めに書く予定ですのでゆっくりお待ち下さい。

…書く事無い…。

あ。彼氏ができましたー（笑）

…さすがに嘘です。すいません。

ヒロイン&ライバル募集中です。
ヒロインは、リリカルなのはのキャラクター、
ライバルは転生者、特殊能力は一個か二個。

一応無印からスタートなのでそこら辺よろしくお願いします。

でわノシ

※更新一旦停止のお知らせ※（後書き）

見捨てないで下さい。これからもよろしくお願いします。

その3　ｆａｃｔｏｒ　ｉｎｆｅｃｔ（前書き）

遅れてすいません。
やっと更新です…。

その3　ｆａｃｔｏｒ　ｉｎｆｅｃｔ

埃一つない真っ白な廊下を若干早歩きで進んでく。
さっき思ったが、埃一つないって正直おかしい。どーなってんの？
何か仕掛けがあるんじゃないかと見回すと、丸い円柱状のナニカがこっちに向かって来た。
掃除ロボットだ。
この廊下がいつ作られたかは知らないけれど、もうちょっとどうにかできないだろうか。
このあたりにここの科学者の狂気（一誉め言葉）を感じる。

ま、そんなどーでもいい事は置いておいて。
とにかく早足で、少しでも早く進む。
その管理局とやらがここに来ないとも限らないし、そもそも何が起きるか
わからないから心臓に悪い。
意外と怖がりなのよね俺。いい年してなにやってんだか。
というか本当に怖いね。至るところから霊の怨念の声が聞こえそう。
おお、こわいこわい。

でも実際にありそうだから嫌だね。霊感ある人には見えたりするんかな。
っつったってこの世界には今のところ俺以外の人間は確認できていないわけだから、
確かめようが無いんだけど。

で、こっから出た後なにしようか？　やっぱり拠点作り？
なーんて考えてたらいつの間にやら大きい広間。あ、広間は大きいか。とりあえずスルーで。

って言ったって、さっきの場所みたいなのじゃないな。
博物館と研究所が合わさった異様な空間だ。
いくつもある通路の両端にはガラスケース。中は大量の武器。
ほとんどがチューブに繋がれていて、柄や先端部にある宝玉を点滅させている。
うーん。どっかで見た様な見てない様な。
名称くらい書いてあるだろと思いガラスケースを覗きこむと、
確かにあったよネームプレートらしきもの。

でも悲しいかな。全く読めない。
書体は英語っぽいけどよく見ると全然別のもの。
むしろ世界中のどの言語にも当てはまらない不思議な字。
ますます異世界っぽくなってきた。
で、肝心の文字はどう頑張っても解読は不可能だったので俺は諦め、
他の武器を見に行くことにした。

てくてくとぼとぼ、物音ひとつしない大部屋をたった独りでゆっくりと。
周りはみーんな武器とパソコン、あと奥の方向にあるいかにもな怪しいエリア。
とりあえず護身用とそこらに飾ってあったナイフをケースから取り出そうと
おもいっきり蹴りつける。

ドガッ！！

…やっぱり泥棒なんてするべきじゃなかったよね。
犠牲は大きかったよ。主に足の指的な意味で。
最初から腰にあるサバイバルナイフ使えばいいよ。

次は気を付ける。
注意力の足りない自分にやれやれと呆れつつ、新たな教訓を一つ身に付けた。

少しバックして、さっき見た怪しいエリアに迷う事無く歩みを進める。
着くまで３０秒。

そこ（・・）は他の場所とは設計が違っていた。
一段、いや二段高い位置にある床には円卓に近い作業机がぽつんと一個。
余裕で周囲に３０～４０人は居られるレベルのサイズ

その真ん中に存在する、異様な雰囲気を放つ長柄の武器。
人が使う事を想定されていないんじゃないかと疑う大きさの、
装飾は一切無く、ただ相手を殺す事に特化した『ハルバード』。
対軍兵器と呼んでいい代物でありながらも、無駄のないカタチの刃。
あまりの美しさに、薄い緑のフィールドがあるのにも気付かず、
柄に触れようとした。

バチッと電流が流れ、薄緑のフィールドが濃い緑に変化し、
狂ったようにスパークが起きる。
普通なら慌てて手を引っ込めるだろうが、俺はそんな事しなかった。
むしろ激しい痛みを必死で抑えながら手を徐々に近付けていった。
そして柄に触れ、瞬間電流を発生させていたフィールドが完全に消滅した。
指先がなぜか針に刺されたかのように痛んだが、電気による火傷だと思い込み、
無視した。

左手で柄の端を、右手で中間を持ち一気に持ち上げた。
ほぼ全てが金属製で、重量は数十キロにおよぶと思われたそれは、意外に呆気なく両手に収まった。
こうして持ってみるとわかるが、かなりデカイ。
俺の身長をもとにして計算すると、およそ2．5メートル。
信じられない大きさ。見た目と釣り合わない重量。
そして一般的な斧槍（ハルバード）にはない特殊な機構。
不思議だらけの物体に、俺は惹かれていき、心の中に独占欲が生まれた。

周りの機械が破損するのも構わずハルバードを片手で振り回す。
これまた不思議な事に、全く振り回されなかった。
というか重さを感じない。
それに、長年使用してきた感じがし、妙にしっくりくる。
謎の違和感。
使ってんのか使われてんのか。
そんなのもわからないまま、元来た道を引き返す。
俺はこのハルバードを自分のものとし、持ち帰る事にした。
後で気づいた事だが、おっさんが管理局に渡すなといっていたのは、一体どれだったんだろうな？　まあどうせこれだろうけど。

帰り道、練習ついでに斧槍を振り回す。
通路の壁が壊れるのも気にしないで。
はてさて。一体どうやってこれから暮らそうと心の内で考えていた。
そうすると突然、視界がぼやけ、周囲からの音にノイズが混ざる。
なんだ？　目眩か？
ふらつく足に手を付きなんとか支える。

急に声が脳内に響いた。

『やっとか。ま、案外速かったかな。
一応及第点だ。』

直接脳に響く若い男の声。頭痛が酷い。

「なんだてめぇは?!　一体なんなんだ!!」

答えは無い。その代わり、視界は暗くなり、意識が薄れる。

『かもーん幸運な人間。お前は選ばれた。』

軽いノリの声が聞こえ、俺は意識を失った。

その3　ｆａｃｔｏｒ　ｉｎｆｅｃｔ（後書き）

引き続きヒロイン＆ａｍｐ；ライバル募集中です。
遠慮はいらないので、どしどし送ってきて下さい。

その４　俺は決定権が少ない、略してはがない。（前書き）

友人に指摘されました。
なんでも、植木の法則というマンガに設定が似ているとか。
全く知りませんでした。
なんかごめんなさい。

その４　俺は決定権が少ない、略してはがない。

暗く深い海の底に沈んでいた意識が、地上を求めて浮かび上がり始めた。
目がまぶたから透ける光を認識し、その光量からここは野外で昼間なのだと教えてくれた。

しばらくゴロゴロした後、パチッと目を見開いて
テンプレートなセリフを呟くべく口を開いた。

「知らない天井……あれ？」

さっき野外と判断したばかりというにも関わらず天井を探すとは、
随分と寝ぼけているようだ。

あくびをしながら目を擦り、何度も瞬きを繰り返し徐々に光になれさせる。
そして次の瞬間絶句した。

視界に映る全てが真っ白だった。
こういう天気とかなどでは無く、色の濃淡すらない一面の白。
上体を起こし、自分の周り３６０°見回すが全て白い。

遠近感を失いそうになるこの空間は一体どこか？
考えられるものを挙げてみる。

１　誰かに捕まり閉じ込められた。
違うな。こんな場所は普通存在しない。というか造れない。

2　自分の夢。
これも違う。ちゃんと近くに例のハルバードがある。
これはれっきとした現実だ。

3　別世界。
これが一番しっくりくる。そうだ。そうにちがいない。
なら早速この辺りを散策しーー、

『やっと起きましたね。』

全く気配を感じなかった！　この声の持ち主が何者かは知らないが、
相当な実力者だ。
殺される可能性もある。
なら、先手を、こいつよりも先にアクションを起こさなければ…！！
すぐさま右手の少し先にあったハルバードを掴み、後ろへ振り回そ
うとして、

『わっ！　ちょっと待って！　敵じゃありませんから落ち着いて！』

慌てふためく声の主にこっちが驚き手を止めた。
それからゆっくり振り向く。

殺意が湧く程のイケメンがそこにいた。
だがイケメンといっても、どこかおかしい。
ＣＧでつくられた完璧な顔、そういった表現が似合う。
シミもホクロも無く、毛穴すらみえない。
誰かのイメージを無理矢理絵にしたような顔はいっそ不気味だ。
昔のギリシャの学者が着てそうな服を着て、手には一冊の大きな本。
立派な青年なのに、イタズラっこを思わせる造形の顔。神様っぽい

格好。
どっかで見た様な…。
脳内で検索をかける。
するとヒットする一人の神。
俺はその名前を言ってみた。

「ロキ…？」

ロキとは北欧神話において災厄の神として扱われる、オーディーンの義兄弟。
美形で頭もいいリア充だが、しばしば悪事をして神々を苦しめる。
彼のラグナロクで神様に喧嘩売った内の一人。
そんな奴が何故ここに？

『あ、君にはそう見えるんだ？　ロキって言われたのはいままでで初めてだよ。』

ギャーー！！　早速違ったー！！
うっわなにこれ恥ずかしい！　多少自信あったからより恥ずかしい！
なんかもう穴に入りたい。どっかない？
あまりの羞恥に頭を抱えながら辺りをのたうち回る。
すると心配してなのか、イケメンが声をかけてきた。

『別に間違ってはいないよ。君がそう思ったのならその通りになるんだから。』
「そう思ったのなら？　どういう事だ。」
『まあその辺りの説明をこれからするから待ってよ。』

と言って謎のイケメンは指を一回鳴らし、俺との間に椅子とテーブルを創造した。

しかもテーブルの上にはしっかりお茶と和菓子が。
座ってと言われ仕方なく座る。
ちょうど喉が乾いていたから茶をすする。旨い。

『じゃあ説明を始めるね。』

和菓子を一口。これも旨い。
咀嚼しながら話を聞く姿勢になる。

「どうぞ。」
『うん、ありがとう。
まずここは無名の地。これからの事を説明する為だけの空間。
それ以外の用途は無い。
で、なんで君をここに呼んだかというと、とあるゲームに参加してもらうためなんだよ。』
「とあるゲーム？　つーかまずお前はなんなんだよ。説明しろ。」
『僕は君たちの世界でいうＡＩ。
君が、この状況を起こした原因だと思う姿形になる。
普通は女神か老人なんだけど…。君は特殊だったようだ。』

つまり、俺はこんな事するのは神のロキぐらいしかいないと思っていたと。
で、こいつは俺のイメージを読み取りその姿になった。
プライバシーの欠片も無いな。

「次。なんで呼んだか。」
『神は皆暇なんだよ。永劫に近い時間を過ごすわけだから。
だから、いくつかの神は考えた。
「いっそ人間を用いた遊戯を作ろう」と。
そこで考え出されたのが、人間をいくらか選び、能力を与え、戦わ

せる事。
人間、特に地球の人間は発送が豊かだから、仮想の世界を次々に造り上げた。
そこに注目しない神じゃない。
つまり、適正のある人間を転生させ、一人につき一人の神が能力を与える。
そしてどこかの仮想（アニメやマンガ）の世界に複数放り込み戦わせる。
最後まで生き残った人間とそれを選んだ神には褒賞を。
死んでしまった人間は魂が輪廻転生の環から外され抹消される。
分かったかな？』

わかりたくもなかった。ここで俺の未来は誰かを殺すか消えるしか無い事になった。
だが拒否もさせてくれそうにない。
ならさっさと進めた方がいい。
諦めて認め、受け入れることにした。

「俺を選んだ神は誰だ？　まさか無名のやつとは言わないよな。」
『そこらは安心してくれ。担当はアルテミスだ。
彼女が男を選ぶのは珍しい。いつもは処女を選ぶんだけどね。
まあ貰える能力はかなり強いよ。歴代最強クラスかな。』
「そりゃ嬉しいね。で、行く世界と能力を詳しく教えろ。」
『残念ながら無理だ。能力の詳しい内容と行く世界は教えてはいけない決まりだから。
でも、一応君が知ってる世界みたいだし、能力の一部や決まりうんぬんは
後で本の形にして送る。』
「なら安心だな。ところで相手は何人で期限はいつまでだ？
のんびりしてたら時間切れとか勘弁したいんだが。」
『相手は最低３人、期限はなし。強いていうなら死ぬまで。

でも達成できないと皆消えるから気を付けて。』
「分かった。いつ出発だ？」
『今すぐ。』

随分と気が早いこと。
でもその方がいいね。
最後にひとつ聞きたいことができた。

「お前の名前は？」
「ロキ、と言いたいけど違うね。
案内人ユト。
次に会うのは勝利が確定したときだ。」

足元に突然穴が開き、座ったまま落ちて行く。
命懸けの殺し合いね。
なかなか面白そうじゃないか。
精一杯楽しむとしますか！
と、上から声が聞こえる。

『開幕は君がたどり着いてから3日後だ！
それまでは誰も手出しはできない！
じゃあ頑張ってくれ！！』
「言われるまでもねーよ！！」

大きな声で叫ぶ。自然と顔が笑っていた。
そしてまた、意識が闇へ落ちて行く。

その前に重要な事に気づいた。
…あれ？　ハルバードどこ？

その４　俺は決定権が少ない、略してはがない。（後書き）

そんな訳で、敵の転生者を募集します。
名前、性別、外見、能力（１２つまで）、性格などをかいて感想欄へ。
一応ヒロインも募集中です。

その5　凶（まが）ればいいと思うよ。（前書き）

いままでちょっとずつ増えてきた文章量ですが、今回は若干減ります。
ただ、明後日もう一回投稿するので許して下さい。

その5　凶（まが）ればいいと思うよ。

ハッと目が覚めた。
床を触って確認するが、今度はちゃんとしたもの、フローリングだ。
頭の中から何か大切なものが抜け落ちたような感覚がするが、無視して立ち上がった。

見た限りここはマンションの一室らしい。
家族連れでも過ごせるレベルのサイズ。で、ここはリビング。

正面にキッチンがあったので、冷蔵庫をあさりに行った。
途中なんか踏んだが、たいして痛くなかったのでそのまま進んだ。

冷蔵庫の扉を開ける。
おっ、意外とものが揃ってるな。でもとりあえず水。
棚にあったコップにペットボトルの水を注ぎ、一気に飲み干す。
生き返った。冷たい水が、体の隅々まで染み渡った感じだ。
もう一杯注ぎながら、さっきなんか踏んだ位置を見る。

ずいぶん分厚いハードカバーの本が、そこに置いてあった。
飲み終わったコップをシンクに置き、リビングへ歩く。
しゃがんで手に取った一冊の本は、一切の装飾がなかった。

タイトルさえもない。
裏には、丸っこい女子高生みたいな字で、
『葉月紫苑へ』
と付箋紙に書いて貼ってあった。
葉月紫苑？　誰の事だ？　まさか俺ではあるまい。

だって俺の名前は……あれ？

思い出せない。

さっきまで、案内人のユトと会話していた時までは、
自分の名前なんて自覚しなくてもわかっていたのに。
そうか。さっき思った喪失感はこれだ。
畜生！　ユトからはこんな事聞いて無いぞ！

答えが本にあるのを祈ってページを捲る。
【この本について】　どうでもいい。
捲る。
【あなたのステータス】　これはこれで気になるが、今はそんな余裕はない。
人は予想していない事に直面するとパニックになる。
それは俺も例外ではなかった。
焦って焦って、ページすらまともに捲れない。

自分の名前を失い、正気でいられる者はまともじゃない。
自分が無くなってしまう気がするから。
自分の存在が危ういモノになった気がするから。

俺はページを捲る傍ら、記憶に欠けている部分が無いか確認していく。
幼い頃の思い出、友人の顔、そして両親の名前。
やはりというべきか、両親は名字が、親友と交わした会話の中で俺の名前が潰されていた。そこだけノイズが走る。
だが、名前以外は無事という事実に心は落ち着き、冷静になった。
ようやく見つけたページには、【状況把握の為に】とサブタイトル

がふってあった。
読んでいく。
なるほど。
全てを並べると莫大な量になるので要約すると、
まず衣食住は完全保証。今いるマンションはくれる。
金は最初１００万貰えるが、それからは自分で稼げ。
名前についてだが、なんでもこの世界にもいる俺に迷惑をかけない為だとか。
じゃあこの世界の俺消せとか思った俺は悪い大人。

で、最後にあるのは一番重要な、殺し合いについて。
戦闘開始時刻は、俺が目覚めから７２時間後。
それまでは見る事も触る事も出来ないそうだ。
随分よく作ってある。感心するね。

一度本を閉じてため息をつく。
今さらながら止めたくなってきた。

それでも、自ら始めたからには途中で降りない。
俺なりのルールだ。まだ死にたくないしな。

本を枕代わりにして一旦横になる。特に理由はない。
精神的に疲れた。それだけだ。
硬いが寝れない程じゃない。

ふと、天井を見て、ひとつの電球が気になった。
なんのへんてつもない普通の電球だが、突然割ってみたいと思った。
脳裏に浮かぶ、一人の少女。
確か彼女は、ある言葉を唱えただけでモノをねじ曲げるという超能力を持っていて…、

彼女のような力があれば、イカれた殺し合いでも生き延びられると思った。
ある訳ないと、笑いながら電球を指でさし、軽い調子で言った。

「…凶(まが)れ。」

突如視界が歪み、激しくはないがそれなりの頭痛が俺を襲った。
何事かと考える余裕もなく、頭をとっさに横に動かす。
さっきまで俺の頭があった場所に細かいガラスの破片が飛び散った。
背筋が凍った。冷や汗が吹き出す。
うわぁ…。なんてこった。結構笑えない。

慌てて体がその人物でないか確認した。
大丈夫だった。男のままだ。

……子供になっていたがな。

もうなにがなんだか。
女かとおもって、子供になってて、危うく自滅しかけた。
とりあえず、今度からは不用意に喋らないことにした。

その５　凶（まが）ればいいと思うよ。（後書き）

まだまだ転生者＆ａｍｐ；ヒロイン募集中です。
どんな案でもいいので、よろしくお願いします。
転生者は、名前と能力（２つまで）、できれば外見や性格、戦い方など。

ヒロインは、フェイトとリインフォースが一歩有利だったり。

お願いします、案投稿少なすぎて辛いんです。

その６　いいか皆。小五とロリでは只の犯罪だが、会わせれば悟りとなる。（

まーだまーだ転生者＆ａｍｐ；ヒロイン募集中です。
どんな案でもいいのでお願いいたします。

その6　いいか皆。小五とロリでは只の犯罪だが、会わせれば悟りとなる。（

とりあえず、この世界にきてから真っ先に気付かなかった俺に、
小一時間蹴りを入れ続けたい。

今考えると確かにコップ取るとき、あれ？　位置高くね？　と思った。
でも疑問にすら思わないとか、年取ったかな。あ、若返ったんだっけ？
まあ体が小さいこと自体はたいした事じゃない。
どうせ長いゲームだ。その内成長するだろ。

それよりももっと重要なのが一個。
冗談のつもりでやった歪曲の魔眼。それが本当に発動するとは。
いや、別に嫌な訳じゃあない。むしろいい。
これからの殺し合いにて非常に頼もしい武器、そして切り札になる。
浄眼でも持たない限り目視は不可能だし、直死の魔眼でもない限り、
俺の目に対抗できない。

ってそうじゃなくて。俺はこの世界に来たらまず最初に、
能力について少しでも多く知るべきだったんだ。

ついさっきまで枕代わりにしてしまっていた本を開き、
目次から貰った能力に関わるページを探した。
あった。一番後ろの方。
すぐそこに折り目を付け大きく開いて床に置く。

見開きの白いページにあるのはたった2行。
【☆あなたの能力について☆】、『魔眼、魔道具作成』のみ。

空白が大きいのが若干気になるが、印刷ミスか。
サブタイトルの星は無視するとして、驚いたのは魔眼の二文字。
能力名魔眼だと？　ならもしかして他の魔眼も使えるのか…。
ものは試し。やってみた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

まず俺が知っている魔眼は６つ。
浄眼、直死、歪曲、石化、暗示、誘惑。
一応いま試せるのは直死と歪曲だけ。
歪曲は限度がわからないので実戦にて試験する。
なので試す魔眼は直死のみ。

一回歪曲の魔眼の力を切る。
プツンと、電源を切るかのようにあっさり切れた。
いままで僅かに歪んでいた視界が正常なものに戻る。
微弱な頭痛もなくなった。
そして直死のスイッチを入れる。
目を閉じて心を落ち着かせる。
イメージは遠野志貴。両儀式のは生物のしか見えないから駄目だ。

目が変質する。この世の全ての、
この世界そのものまでの死を理解、認識できるように。
変化が完了したのを確認した。ゆっくりまぶたを上げる。

…覚悟はしていたが、やはり酷い光景だ。
視界全ての物質に黒い線が走り、線の集まった所には大きな点も見える。
この目の持ち主も言っていた。この世界はこんなにも脆いって気付かされる。

台所から包丁を一本持ってきて、テーブルの上の花瓶の線をなぞる。
表面を軽くなぞっただけなのに、花瓶は斜めに崩れる。
花もなにも入っていなかったので溢れたものはひとつもない。

次は何をしようか迷って、包丁を置いた直後脳が燃えるように熱くなった。
いくらこっちの直死が負担が大きいといっても、異常だ。
こんな代償のある武器なんてそうそう使えない。
すぐに直死を止める。元の視界に戻る。だが熱された脳はなかなか冷えない。
これで一旦魔眼は終了。
お次は魔道具作成スキル。
とりあえず、簡単な爆発符でも作るか。
作るのに必要な知識が勝手に頭に入ってきた。
紙とペンのみでできるのか。お手軽だ。
またやり方も簡単。適当なサイズに切った紙に、ルーンを書き、そこにそこそこの魔力を流し込むだけ。
だけ…なのだが、込める魔力が意外に多い。
２０枚を超えた時点で魔力が切れた。
俺の魔力量少なすぎだろ。平均のちょい上しかないとか。
つったってないよりはマシだから文句は言えない。

なんか魔力を多く使ったからか、体がだるい。
このまま寝ようとも思ったけど、まだ本を隅々まで読もうと考えてまた本を開く。
ちょうど開いた場所が、自分を選んだ神とのコミュニケーションの仕方だった。
どうやら、心の中で心の中で名前を呼ぶと下級神の場合は会話のみ、上級神の場合はこっちに呼べるらしい。

やろうと思ったが、アルテミスって結構面倒な神だった。
外見は確実に美人だが性格は若干荒い。
例をだすと、水浴びを狩人に見らた事に怒り、その狩人を鹿に変えて、
わざわざその狩人の猟犬に殺させるといった。
特に処女でない女に対しての扱いが酷い。

そんなやつを呼んだらどうなるか。
ろくな事にならない。
止めよう。
さて、寝るか。
すると後ろから大きな足音が。確か後ろは大部屋があったな。
だんだん近付いて来ている。
振り向いた瞬間、鼻に凄い衝撃が。
「そおい！」
「ぶべらっ！！」
少女と幼女の中間みたいなやつに飛び蹴り喰らった。
数歩後ずさる。
「ッテメ、何しやがる！」
「なにしやがるはこっちのセリフじゃボケ！！
いつまでたっても呼ばねえし、私の事面倒とか思ったろ！！」
「思ってねえし、まず誰だお前。幼女のクセに生意気な。」
「幼女っていうな！」
また鼻に蹴り喰らった。やべ、鼻血止まんね。ティッシュティッシュ。
「私はアルテミスだ！！」
「はあ？」
こんな幼女が？　冗談もほどほどにしてほしいね。
証拠見せろ証拠。
『あー、アルテミスさん？　あなたの名を騙る幼女がいますよ。

今すぐ来て下さい。』
『お前さすがに死ぬか？』
念話に反応したよ。本物だった。
「本当すいませんでした。」
「全く…萌えるかと思ったからこの姿にしたのに。
失敗だったか？」
いやそのままで。
「よろしい。」
あーもう。混乱の極みだわ。
幼女は可愛いからいいけど。
綺麗で全く傷んでいない金髪。
顔は幼いながらも、凛々しく、泣き黒子が禁断の色気を放っている。
もちろんシミソバカスも一切ない。
年の割には発達したスタイル。
身に纏うワンピースは薄い水色。
うーん、ホントこの世のものとは思えない美しさ。
確かに人外っぽい。

「なんで呼んでないのに来れたの？」
「私だけの特権だ。父上にこの姿でお願いしたらあっさり。」
ゼウスってそっちの趣味あったのか。
個神の趣味だし口答えはしないが。

あ、そうだ。頼みたい事があったんだ。
「ちょっと俺の能力を」
「とりあえずお前を、これからの三日間で鍛えてやる。
ありがたく思え。」
…ありがたく思います。
俺の意見がほぼ無視された状態で始まるこれからの戦い。
まず、生きて帰れるかな？

幼女に訓練されるってなんかこうくるものがあるね。

戦闘開始時刻まで後６９時間。

刻一刻と、運命の時は迫っていた。

その６　いいか皆。小五とロリでは只の犯罪だが、会わせれば悟りとなる。（

【浄眼】
ありえざるものを見る目。幽霊とかも多分見える。

【歪曲の魔眼】
見たものをねじ曲げる目。右目は右回転、左目は左回転させる。
ただし、現象と、自分がまげられないと思ったものはまげられない。
失明の可能性を持つ。

【直死の魔眼】
ものの死を線と点で見れる目。それで切った場所は再生すらできない。
ただ、代償が大きく、廃人になる可能性も。

その7　邂逅は直死の後で。（前書き）

アルテミス「呼んだ？」

紫苑「帰れ」

その7　邂逅は直死の後で。

【Ｓｉｄｅ　葉月紫苑】

地獄の鬼も裸足で逃げ出すような訓練が続いた。
詳しい事はトラウマなので記述したくないが、少しいうと修行は三日におよび、そのおかげで俺の魔力量は大きく上昇した。て、いったってたいした量じゃない。１・５倍程度だ。もとが低いから大変だな。
そして、さまざまな事を教えてもらった。
禁則事項が多く所々喋れないものがあったらしいが、それを差し引いても十分だった。

能力者には決定的な弱点があって、それを攻めるのが有効だという。
弱点にも２つ有り、所持する能力の弱点と本体にある弱点だ。
本体にある弱点は確実に致命的な弱点になると言われた。
ちなみに俺の弱点は、魔力素に因むものらしい。
空気中の魔力が濃い場所には行くな、だと。
気絶したりしてな。無いか。

ところで、あっという間に戦闘開始時刻になったわけだが、俺はこの街、海鳴の中で一番高いビルの屋上に来ている。
もちろん転生者の捜索の為だ。
アルテミスから教えてもらった気配隠蔽の札。
それを使って発見されないようにして海鳴全域を見回す。
もちろん遠くまで見えるはずないので、直死の魔眼を一分ごと二十秒ずつ使用する。
短く区切ったから、脳が加熱することもない。

現在時刻は夜９時。一般人は普通出歩かない時間。
だから不審な人影を見つけたら調べ、敵の場合攻撃する。簡単なお仕事です。
お、お父さん残業お疲れ様です。

張り込み？の定番、あんパンと牛乳を近くのコンビニから買ってきて食べていると、突然ちょっと遠くの学校から眩しい光が。
念のため直死を志貴のものに切り替えると、案の定空中に莫大な魔力を撒き散らす宝石が浮いていた。

どうしよう。超行きたくない。
だって魔力を撒き散らす宝石だよ？
間違い無く魔力素濃いよ。
でも行かないと帰ってからアルテミスに殺されそう。この腑抜けがッ！！　って。
念のため持ってきたハルバードを掴む。
仕方なく転移符で学校の校門の位置に移動。
張ってあった結界を、直死で見える線を切って破壊。
門を乗り越えて原因の場所へ向かった。

【Ｓｉｄｅ　高町なのは】

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ』

レイジングハートが、開始の合図を言った。
どうしてもこの瞬間は緊張するなぁ。

きっちり気を引き締めて、封印の為の呪文を、間違えないように一字一句しっかり発音する。

「リリカルマジカル！　ジュエルシード、シリアル？？、封印！」
『Ｓｅａｌｉｎｇ』

掲げたレイジングハートに魔力を注ぎ、封印の魔法を発動させる。
辺りにピンク色の光が溢れた。
もちろん、結界をはっているから、外にもれることはないんだけど。
一瞬だけ目をつぶり、開けたらもう光は収まっていた。
よかった。無事に封印できたみたい。
乱れた呼吸を整える。

「なのは、お疲れ様。」

ユーノくんが近くに駆け寄ってきてくれた。
すぐに、ゆっくり落ちてくるジュエルシード。
青いひし形の宝石にみえるそれには、？？というシリアルが刻んであった。

「これでいくつ目だっけ？」
「５つ目だね。あと１６個、頑張ろうねなのは。」

一周間で５個だから、もしかしたら１ヶ月で集まっちゃうかも！
…それにしても疲れたな。
もう眠い。

「じゃあ帰ろうか。夜も遅いしね。」
「そうだね。」

ユーノくんを肩に乗っけて学校の外に歩いていく。
歩く間にユーノくんは結界を解こうとしている。
結界が、いつもとは違い崩れるように消えていく。あれ、おかしいな？　どうしたんだろう。
「なのは！　大変だ、結界が誰かに破られた！」
慌てた口調で話すユーノくん。
フェレットだから表情はあんまりわからないけど、危ないのはわかった。
「こっちに来る、気をつけて！」
『Ｂｅ　ｃａｒｅｆｕｌ，ｍａｓｔｅｒ』
目を凝らすと、確かに人影がみえる。
でも…なんでだろう？
目の部分だけが青く輝いている。
その誰かがかなり近くに来て、光に当たって姿がわかるようになった。
結界を破って来たその人は、中学生くらいの、不思議な男の人だった。

【Ｓｉｄｅ　葉月紫苑】
校庭の真ん中あたりにいた犯人は、小さい少女だった。
服装はどっかの制服っぽい。

肩に乗っているイタチもどきはこっちを睨んで動かない。
手に持った杖？はよくある魔法少女がもつふざけた玩具ではなく、機械でできたまともな代物だ。
まあ幼い少女だからといって警戒を解く理由にはならないのだけど。
右手に持っているハルバードの刃先を少女に向ける。

「お前何者だ。まさか一般人だなんていうなよ？」

二人とも体が一瞬強張った。
戦闘にはあまり慣れていない証だ。

少女の方が若干ためらった素振りを見せたが口を開いた。
最も、その前に肩のフェレットが喋ったのだが。

「僕はユーノ・スクライア。魔導師です。
この街に散らばったジュエルシードというロストロギアを回収する為に動いています。
この街の住民に危害を加えるつもりはありません。」

…つまらん。一番最初に出会った人物怪しいは転生者では無く、ただの回収者か。
なら俺は関わらない方がいいのかもな。
見た限りこいつは主人公かヒロインだ。
どうせしばらくしたらこいつの近くに転生者がつくだろう。
見つかったらヤバい。いきなり実戦は避けたいところ。
よほどの事情がない限りは近付かないようにしよう。
今日は収穫なしか。
仕方ない、帰るか。

「行け。」

「あ、え？　はい。」
「ただし、こちらに余計な荒事を持ち込むようなら、俺は容赦なくお前に剣を向けよう。」
ハルバードを降ろす。あわてて走り去って行く少女とフェレット。
また会うのかもな、嫌でも。
そんな気がするよ。

「ふぅ、疲れた。飯どうしよう。」
「おかえりなさい。お風呂にする？　ご飯にする？　それとも…私？」
俺に安息の日々が訪れるのはまだまだ先のようだ。
とにかく。
「新妻風出迎えとかどういう神経してるんだお前は。」
「テンプレートなセリフなのに答えないとかどういう神経してんだお前は。」
まずはこのふざけた幼女をどうにかしないとな。

その7　邂逅は直死の後で。（後書き）

週二更新始めました。

その８　はーい、邪魔者はしまっちゃおうねぇ～（前書き）

ゆっくりしていってね！！

その８　はーい、邪魔者はしまっちゃおうねぇ～

朝起きて、眠い目を擦りながら自分の部屋を出てリビングに向かう。
キッチン寄りにあるテーブルには何故か和食の朝食があった。
湯気があがっており、まだできたてのようだ。

キッチンにはあたふた動くちっちゃい生物。
いつの間にやらあったパジャマを着ているそいつに声をかける。

「お前がこれ作ったの？　すごいじゃん。」

棚の中をあさっていたアルテミスは顔をあげると、ドヤ顔でこっちにふんぞり返った。

「この程度私には朝飯前なんだよ。
どうだ、私の凄さを思い知ったか？」

確かに凄い。だけど一個ミスを犯しているな。

「そこの料理本はなんだ。」
「！！」

片付けを忘れたのか無造作に置いてある料理本。
至るところに折り目が付いている。
何度も何度も確認したのだろう、自然に本が開いてしまっている。
見栄をはるから…。

「うるせぇ早く食え！　冷めるだろうが！」

真っ赤になって怒るアルテミスをなだめながら、俺は、精神が体に引っ張られるって本当だったんだと思った。
カリスマ溢れる神様も好きだが、可愛い神様も好きだな。
椅子に座って、アルテミスに言われた通りさっさと食べる。
美味しい。鮭の焼き加減もいいし味噌汁も少し薄めでちょうどいい。
これで人間だったらいい嫁さんになったろうに。

「ところで。」
「ん？」

アルテミスが口に浅漬を入れながら喋る。
こら、マナー違反だ。やめなさい。

「市街地に不審な魔力が渦巻いている。
正確に言えば市街地に向かう物体が、だな。」
「行けと？」
「ああ。おもいっきり暴れてこい。
たまにあれを使ってやらないと拗ねるぞ？」

あれとは恐らく俺の部屋に立て掛けてあるハルバードの事。
そうか。なら行こうか。
食器を片付けて、身支度を始めた俺にアルテミスが一言言ってきた。

「あのハルバード、柄の端に短刀が仕込んであるだろう。近距離で使え。」

用意終了。ハルバードの柄に転移符の座標を示す札を貼る。これで懐の召還符を使えば呼び出せる。一応ポケットにはサバイバルナイ

フ。
出迎えに玄関までアルテミスがきてくれた。
玄関で靴をはく俺は、全ての子どもを喜ばせるであろう一言をこっそり言った。

「お土産、何欲しい？」
「ケーキ！」

ひまわりのような笑顔だった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

で、やって来ました海鳴市街地。この街で一番都会っぽい。
しかし迷ったおかげで現在は正午を少し過ぎた頃。
着いたのは11時くらいだったが、地形把握と高い場所の確保、それと昼食でずいぶん時間をとってしまった。
こりゃ怒られるかな。

ご機嫌とりとお土産の為にケーキ屋を探す。
大きな百貨店が見えたのでそこへ向かう。

途中、赤信号に引っ掛かった。
ちょうど反対には小学生くらいの男女。
何かを少年がプレゼントして、それを喜ぶ少女。
リア充め、死ぬがよい。
呪詛の言葉を口の中で呟きながら信号が変わるのを待つ。
そういえばマンションのお隣に挨拶いってないな、なんて考えてい

たら、

突然、

爆発的な魔力流。

ああ、確かにさっき少年が少女に渡していたのはこの前みたジュエルシードっていうやつに近かったさ。

だけど…

なにも、目の前で発動する必要はないんじゃないか？

魔力流の原因を潰そうと内ポケットから転移符を取り出す…つもりが、できなかった。

心臓が強くドクンと鳴る。

すると胸の付近に急に現れる激痛。

畜生、一体全体なんなんだ！

何故こうなったのかが全くわからない。

症状は心臓発作に近い。

じたばた胸に爪をたててのたうち回る。

とはいっても激痛に耐えられず、俺はあっけなく意識を失った。

目に映る視界は、この地球上のどの植物より大きくなった樹が俺もろとも地面を破壊する光景だった。

…

…

…

どれくらい時間がたったのか。

心臓の痛みは完全に消えており、後遺症も今のところないようだ。
夢かと思った、しかし目の前に広がる一面の樹が、さっきのは現実だと理解させてくれた。

不幸中の幸いというべきか、俺は全く樹に巻き込まれなかった。
ついでにいうと後遺症もなかった。
だがその代わり、周囲は樹に囲まれ閉じ込められている。
奇跡的に手元に残っていた転移符を破り捨てる。

俺の作った札のほとんどは破壊する事で効果を発揮するものだ。
大抵の攻撃系の札にはFアンサズという発火にルーンを刻んである。
起動トリガーの言葉を発すると発火、そして効果発動となる。

だが一部のもの、特にサポート系や回復の札には書いていない。
勝手に発動されても困るからな。
だからいちいち手や道具を使う必要があるのだが…。

それはさておき。
一切のタイムラグ無く出現するmyハルバード。
それを鎌のように構えた。
魔力を注ぎ、刃の部分に現れる魔力刃。
色は深く濃い青色。俺の魔力光だとか。

全長が3メートルに届くか届かないかの大きさになったハルバードをおもいっきり叩きつけた。
無論目標はこの大樹。
目の前の樹は木っ端微塵に砕け散り、太陽の光が射し込んだ。

落ちてくる破片に気をつけながら外に出ると、同じような樹がいっぱい。でかすぎんだろ。

いっそのこと燃やすかなんて思いポケットから爆発符を一枚。根っこの場所を探そうとしたその時、強い魔力反応。
とっさにビルの屋上、ついさっき俺が探ってたところを見る。
するとまたいる白い魔法少女。
よく見ると後ろの方にはこの前には一緒に居なかった男の子が。
どっかでみた白と黒の陰陽剣を持っている。

また面倒ごと起こしやがって。
いっぺんお灸を据えてやるよ。

白いのがレーザーっぽいの撃とうとしているが関係無い。
魔力で強化した脚で一気にビルの屋上に飛ぶ。

「誰だ！」

赤い外套に白い髪の少年はいきなり現れた俺に警戒する。急にオーラが出やがった。

「この前の男の子！」

魔法少女は覚えてるようで、わざわざ砲撃を中止して驚いてくれた。

「なのは、知り合いか？」
「うん。学校でジュエルシードを見つけた時に出会ったの。名前も知らないけど…。」
「そうか…なら事情を話せば協力してくれるのかもな。」
「お願いしてみよう。」

おい、俺を置いて会話を進めるなよ。

「あの…私高町なのはって言います。
もしよかったら私達と一緒に…きゃあ！？」
「なのは！？　お前、なにをする！？」
なにって？　ただ斬りかかっただけだけどなにか。
「別にいいじゃないか。ケガないんだし。」
悪びれる様子一切なく答える。まあ挑発の一種なんだが。
「くっ、なのは！　先にジュエルシードを封印しろ！　俺はこいつを止める！」
「わ、わかった。気をつけてね竜君！」
俺らから離れて封印にいくなのはとかいうガキ。
「で？　どうする？」
ポケットからありったけの札を取り出す。
「どうするもなにも、行くぞ！」
竜というやつが挑みかかってきた。
どうせこいつは転生者だ。遠慮の必要はない。
歪曲の魔眼を起動させた。
片手でハルバード、片手でハルバードから抜いたナイフ。
「来い、殺してやる。」

邪魔者は、殺さないとな。
厄介事を持ち込む野郎はいらないから。

高くハルバードに掲げる。

それが、開始の合図になった。

その８　はーい、邪魔者はしまっちゃおうねぇ～（後書き）

アクセス２００００、ＰＶ５０００を越えました。本当にありがとうございます。
これからもよろしくお願いします。

その9　少年幻葬～nekura fantasy～（前書き）

初めての戦闘描写。
出来れば広いこころでよんであげて下さい。

その9　少年幻葬～nekura fantasy～

「行くぞオラァ！！」

開幕直後にハルバードを全力で投てきした。

「くっ…！」

もちろんエックスの字型にクロスされた陰陽剣によって弾かれる。
だが、弾かれ、ハルバードが飛ぶ方向はこっち向き。
高くジャンプして空中でそれをキャッチ、そのまま一回転して叩きつけた。
自重と遠心力、そして俺の腕力が加わった一撃は、相手を吹き飛ばすには充分だった。

追撃も考えた。しかし空中で普通に受け身を取られ着地されたのであきらめた。

「投影・開始（トレース・オン）。」

バックステップで大きく距離をとられる。
そして呟かれる呪文。
同時に現れる黒い洋弓と捻れた剣。
辺りの気温が一気に下がった。
あれはヤバい！！

防御系の札を全部使い、現時点での最強の魔力防壁を作った。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ（我が骨

子は捻れ狂う）・」

キッとこちらを睨み付けた転生者。
ついに初撃が放たれた。

『偽・螺旋剣（カラドボルグ？）！！』

矢に添えてあった指が離れた直後、知覚させる間もなく強烈な閃光と爆発に飲み込まれた。
防壁はあっさり破壊され、威力軽減にしかならなかった。
それでも、致命傷は避けられた。
おかしいな？　宝具はこんなに威力低かったっけ？

辺りは黒煙によって全く見えない。
だが、俺なら、直死の魔眼を使う俺ならはっきり見える。
吹き飛ばされたおかげで離れた距離はおよそ１０メートル。
死の線でなんとかわかる人間のかたち。
その両足の、関節辺りを治せるレベルで曲げる。
おかしな内股のようになった。

「あああああ！！」

関節が本来曲がるはずのない方向に曲がったからか、ものすごい大きな声でわめく転生者。
落ち着くのをまって近づく。
両手にハルバードと仕込みナイフをもったままだが。

「お前、どうしてこんな事を！」

どうして？　ケンカを買ったからには最後までだろ。

売った俺も悪いが買ったお前も悪い。

「お前、竜とか言ったか。
転生者の癖になにいってんだ？」

そもそも俺らが転生した理由は殺し合いのためだろうが。
なのに、戦いたくないみたいなこといいやがってよ。
偽善者か？　あぁん？

「この世界にきたなら、ハッピーエンドを目指そうと思うのが普通じゃないのか！？」
「あいにく、俺はこの世界がなんなのか知らないんでね。
仮想の世界の住人なんざ、殺す事に躊躇いも躊躇もねーよ。
つーかお前俺を殺す気で放ったろ。」
「非殺傷設定っぽくしたんだ。込めた魔力も少ないしランクも下げた。
直撃しても死にはしない」
「あっそ。」

あ、待て。もしやこいつ、聞いてないのか？

「お前、ここに来た理由くらいは流石に知ってるよな？」
「当たり前だ。犠牲者を無くし、悲しみを和らげるためだろう！」

ハッ、笑えるね。基本ルールさえ知らないとは。

「わかんねぇなら教えてやる…といいたいが、面倒だ。
こ　こ　で　死　ね　。」

今できる最高出力で胴体を捻切りにかかる。

パキッといい音がして、そのまま千切れるかと思ったが、邪魔が入った。

「だめーーーー！！」

高町なのは、白い魔法少女だ。
ピンク色の砲撃が俺だけに当たるように飛んできた。
封印は終わったのか。予想外だな。
あと数秒で殺せたのに。

ハルバードを振り回し、向かってくるレーザーを打ち消しながら後ろに下がる。

転生者は胸から光に包まれた剣の鞘を取り出した。
みるみる治る全てのキズ。
『全て遠き理想郷（アヴァロン）』か。
厄介過ぎる。
さてこれからどうしよ…危なっ！！
剣の雨が降ってきた。
高町の援護のつもりか。

「工程完了（ロールアウト）
全投影待機（バレットクリア）
停止解凍（フリーズアウト）
全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）！！」

もう一回くる剣軍。
元々が狭いビルの屋上だ。そんなに逃げ切れない。
あっという間に追い詰められた。

「真っ正面はきついか。
ここらが潮時かね。」
「なにをぶつぶつと。投降するなら今のうちだぞ。」
「だが断るってね。」

一旦目を閉じる。
そしてゆっくり開く。

ありとあらゆるものを石化させる魔眼が、現世に降臨した。

直視したかは重要じゃない。
相手を見た。ただそれだけで石になる。

「マズイ！　なのは逃げろ！！」

しかしもう遅い。
二人とも足の先から段々と石になっていっている。
一応なのはは対抗しているようだが無駄だ。
結局止められず、諦めるしかない。
止める方法は１つだけ。
俺が目を閉じるか、それとも…

「全て遠き理想郷（アヴァロン）！！」

彼のアーサー王が持っていた聖剣の鞘。
真名解放すれば所有者を全てから守るという。
同時に擬似的な不死も得る。
それなら確かに治療も可能だよ。

まあその間に逃げさせて貰うよ。

後ろで待てと聞こえたが待たない。
というか待つ馬鹿はいない。

屋上から飛び降りする。
無論途中で転移符で家に帰るが。

アヴァロンの強烈な光は目眩ましになる。
自業自得になるのかな？

「お願い！　話しを聞いて！」

聞かねーよあほ。

全く…初戦闘はなーんかもやもやした結果で終わったな。次はもう少し上手く殺りたいもんだがね。
文句言っても仕方ない。
今日はさっさと寝る。

案の定お土産忘れて途中の翠屋ってところで買って帰った。
店員さんの顔がどっか高町に似ていたが、気のせいだよな？

その9　少年幻葬～nekura fantasy～（後書き）

剣と魔法と学園モノ。３が面白い。
更新進まない…。
すいません…

その１０　わかりやすいＥＣ兵器（前書き）

今回は説明回です。
なので短めです。

タイトルの元ネタわかった人は感想欄に。

その１０　わかりやすいＥＣ兵器

「ん？」
朝、昨日の精神的な疲れも取れないままベッドから飛び起きる。
洗面所に行って顔を洗っていたら左手首から腕の半分までくらいにかけて刺青があった。
尖ったラインだけでできている、かなり刺々しいものには一切覚えがない。
なんだこれ？　いつの間に？
困ったときのアルテミス、ってことで
リビングのソファーに座り、テレビでアニメを見ていたアルテミスに問いかける。
「ちょっと悪い。気がついたら変な刺青があったんだ。これなんだか知ってるか？」
テレビから顔を一旦あげてこちらをみた。
「ああ、それか。お前、昨日仕込みナイフ使ったろ？　だからだよ。」
つまり、お前のせいか。
一回殴らせろ。
「だが断る。知りたいんならｇｇｇｒｋｓ。」
「ググって出たらおかしいだろ。さっさと教えろ。」

しょうがないなとしぶしぶ自分の部屋からホワイトボードとマジックを持ってくるロリ女神。
伊達メガネと白衣を着て講義を始める。

「まず、お前の持つハルバードは、ディバイダーという兵器だ。
ここは違う世界にあった世界の戦乱時代、魔法をつかうものへ対抗するために作られた『世界を殺す毒』。
その短剣だが、リアクター、反応触媒だな。
大抵無機物の小さいもので、血液認証させることによって大きな力を得る。
…ここまでで質問は？」
「ディバイダーの数、その世界とはどこか、あと血液認証の仕方。」
「数は正確なのは不明。最低９９６個。もちろん試作品なども含むが。
世界は知らん。確かベルカとかいう国。
血液認証は簡単だ。自分の血にリアクターが触れればいい。」
「続けてくれ。」
「わかった。
血液認証、リアクトするとほぼ不死になる。
魔法は特殊なのを除いて無効。
再生能力も追加される。
またそれらと別に１つ能力追加。
主に肉体の硬化や超速再生だ。」

反則レベルなシロモノだな。でもいいことばかりじゃないんだろう？

「当たり前だ。
リアクターにはエクリプスウイルスが付いている。
エクリプスウイルスに感染すると強烈な殺人、破壊衝動に襲われるようになる。

抑える手段はただ1つ、人間を殺す事だ。
さもなくば、死ぬ。」

言葉が出ない。
俺は人を殺さなければ生きられない身体になってしまったというのか。
怖くてたまらない。
自然と指が震えた。

「まあ落ち着け。どうせ他の転生者を殺すんだ。問題はない。
続けるぞ。
エクリプスウイルス、別名ＥＣウイルスは宿主をえらぶ。
適性がないと死ぬからお前は幸運だったな。
というか適性なきゃ選んでない。」

あらかじめ知っててていたんか。
気に食わない幼女だなおい。
撫でるぞこのヤロー。

「許可。」

撫でてたら落ち着いた。ふわふわの金髪が気持ちいい。

「というわけで、ピンチになったら遠慮なく使え。デメリットはない。」
「って言われてもなー。やっぱり抵抗はあるよ。恐ろしいもんな。」

俺には若干手に余る。
そもそもハルバード自体上手く使えてない。
練習あるのみだな。

「ありがとう。アニメ邪魔して悪かったな。
お隣に挨拶行ってくる。」
「録画してるから大丈夫だ。そしてお隣は早朝出掛けた。」

そっか、残念だ。なら帰ってきたら行こうか。

「了解。じゃあ屋上で結界張って素振りしてくる。」
「じゃあなー。」

暇な時間を潰すべく、俺は家をでた。
向こうの方向に例のジュエルシードの反応があったが無視する。
わざわざ巻き込まれるような真似事はしない。
生き延びられればいいのさ。
もう少しで大きな事件が起きる気がする。
その時まで温存しとこう。

…ヤベッ、カギ忘れた。

その１０　わかりやすいＥＣ兵器（後書き）

ヒロインがリインに決定しました。
答えてくれた皆さま、本当にありがとうございました。

その１１　無口？少女と不審男（前書き）

ご都合設定は見逃して下さい。

その１１　無口？少女と不審男

「……」
「……」

目の前に、緋色の長髪の女性と金髪をツインテールにした少女がいる。
テーブルを挟んでソファーに向かい合って、
金髪の少女と俺は下を向いていた。
この部屋に来てから皆一切喋っていない。
その間に緋色の髪の女性はずっと俺を睨んでいる。
…あまりのストレスに胃潰瘍になりそうだ。
というか胃が痛い。

どうしてこうなった。

その答えを知るには、およそ３０分前にさかのぼる。

俺は一時間ほど素振りと魔法、そして札の組み合わせなど試していた。
素振りは練習と体力作りを兼ねて。
魔法は補助、肉体強化の効率の上昇や罠の作り方など。
札はそのまま。
で、終わったあと結界を解こうとして愕然とした。

俺、防音と侵入禁止の結界は張ったけど魔力を外部にもらさないようにする結界は張ってない。
つまり、魔導師か、それなりに強い魔力を持ったやつがこの周辺にいますよ～と宣伝していたことになる。
ヤベ。どうしよう。
え？　俺終了のお知らせ？

焦った俺は、ここ近辺の人に申し訳ないと心の中で謝りつつ、ランダムに魔力を撒き散らす作業を始めた。
位置を特定させない為の手段だが、正直無駄にしかなってないと思う。
確か相手の女の子と転生者は小学生中学年くらいだった。
洞察力その他もろもろが鈍いことを祈る。

チクショウ俺の馬鹿と自分を罵りつつ自室に戻ろうとすると、金髪の少女と緋色の髪の女性とすれ違った。
ハルバード転移で送ってよかったと思うのもつかの間、緋色の女性の方にこっそり耳打ちされた。

「…後で来い。」

よく見れば女性は鋭い目付きで俺を睨み、少女は疑ってるみたいな視線。

バレたよ。誰かは知らんが拠点&素顔バレた。
二人は俺の部屋の隣に入っていった。
しかもお隣さんかよ。最悪だね。

家に入るやいなやアルテミスに泣きつく。

「ねぇ、敵らしき奴に出会ったんだけどどうしよう！？　逃げる！？　それとも戦う！？」

アルテミスは深い深いため息を吐いて、キッチンの棚から贈り物を持ち出した。
俺に差し出してこう言った。

「気軽に行ってこい。どうせ金髪ツインテールだろ？　なら事情を話せば仲間になってくれるさ。あいつは多分協力者を求めている。大丈夫だよ。」

肩をバシバシ叩きながらニコッと笑った。

「お前の好みだったりしてな。惚れて渡すの忘れんなよ？」
「もちろんさ！」

意気揚々と家を出た。
当たり前だが、ハルバードとかはおいてある。札は常備だが。

意気揚々と、隣のドアをノックした。
直後開いたドアから見えた冷たい視線に凍った。
アルテミスの嘘つき…！

そうして現在に至る。
重たい空気を被えるだけの勇気は俺にはない。お願いだからどっちか喋って下さい。

出されたお茶に口をつけるが、一切味がしない。もうやだこんな状況。

「あんたさぁ、目的は何？　ジュエルシードかい？」

ジュエルシード。まあ魅力的な宝石だわな。
だが俺はわざわざ巻き込まれるような真似事はしないと何度も言おう。
だからそれは誤解だ。

「ジュエルシードには興味ない。
むしろ差し上げよう。」

俺はジュエルシードを1つも持っていないのが残念だが。

「まさか局の魔導師か？！」
「違う違う。逆だ。俺は管理局に敵対している。
まだアクションは起こしてないがな。」

といっても警戒は解かない犬耳の女性。
そういえばこいつ人外だな。
外の廊下では無かったな。隠してたのか。
見えづらいが尻尾もある。

向こうがなにか言う前に、ペースを取られぬよう俺は一気に話しを持ち出した。

「実は俺は協力者を探している。」

この状況から「協力してくれませんか？」にはならないと思う。

この二人のどちらが上なのかは知らないが、金髪の少女は話さない。ならいい点を売り込み、仲間になって貰うしかない。

「君たちが会ったかどうかは知らんが、ジュエルシードを集める者に白い魔導師の少女がいる。その仲間に俺の倒さなければいけない敵がいるんだ。」

苗字はわからないが竜とかいうやつ。
能力は多分無限の剣製。
いつかあいつもこの殺し合いのことをしるだろう。
なら先に、あいつが俺を殺すのを躊躇うものが必要だ。

「あいつは強い。それに助っ人もいれば俺に勝機はない。だから二人に協力を頼む。
当然だが損はさせない。ジュエルシード集めには全面的に手伝おう。」

と、ここでようやく少女が口を開いた。

「その話し、本当ですか…？」
「命に関わってるんだ。嘘はつかない。」

少し悩んだような顔をして考える少女だったが、まっすぐこちらを向いて話した。

「お願いします。」
「こちらこそ、よろしくお願いします。」

ぶかぶかと頭を下げた。

「ところで名前をいって無かったな。
俺は葉月紫苑。
紫苑って呼んでくれ。これからよろしく。」
「あ、私はフェイト・テスタロッサです。
こっちは使い魔のアルフ。
私のこともフェイトでいいですよ。」

握手をした。
なんか幼い少女にしては傷付いた手のひらだな。苦労してんのか。
で紹介されたアルフはしかめっ面で答えた。

「アタシはなんかそいつ嫌いだが、フェイトがいうなら仕方ないね。
アルフだよ。よろしく、紫苑。」
「よろしく。」

こうして俺は、初めてこの世界で協力者を得た。ああ、アルテミスは例外。

そして、俺たちはこれからのことを話しあった。

「これ、つまらないものですが。」
「わざわざありがとうございます。」

危うく忘れるところだった。

その１１　無口？少女と不審男（後書き）

そんなわけでフェイトさんが仲間になりました。
やったねたえちゃん！　仲間が増えるよ！

「おいやめろ」

おｋ。

なのでこれからはフェイトさんとの行動がメインになります。
あくまでヒロインはリインフォースですよ？
か、勘違いしないでよねっ！！

その１２　俺の（心が）泣く頃に。（前書き）

なかなか進まん。
ごめーんね。

その１２　俺の（心が）泣く頃に。

前回のあらすじ。
フェイトさんと仲良くなりました。

…ごめん。はしょり過ぎた。
変に短くしようとするからこうなるんだ。
ちゃんと話すわ。

えっと、ちょうどお隣さんだったフェイトさんたちに、俺のうっかりから魔力バレしたので事情を話して同盟を組んでもらいました。

完璧だな。
あ、わからない人は前のお話呼んでね。

とりあえず信用して貰うために、いくつか贈り物をすることにしました。

自分の手の内を晒すことになるが、仕方ないんじゃあない？
もちろんディバイダーやらリアクターやらの詳しい情報は言わない。
…いずれ敵対してしまうかもわからないんだ。注意しておきたい。
なので公開するのは魔眼と数種類の札のみ。

「まずこれ。緊急時のためのオリジナル転移符。二枚一セット。」

アルフとフェイトさんに一セットずつ手渡しする。

「ありがとうございます。」
わざわざお礼をいうフェイトさん。
律儀だな。ええ子や…。
で、裏表をチラチラ調べたりしたり、匂いを確認しているアルフ。
失礼すぎじゃね？

「これの使い方は？　あんたにしか使えないんなら何の意味もないんだけど。」
いちいち言葉が強いんだよ。
俺が嫌いなのはわかるけどさ。
何で嫌いなのはわからない。

「破るだけで発動する簡易符だ。
転移の仕方は引き寄せ型。二枚は魔力の糸で繋がっているから、片方が壊れるとそれを持っている人物や物体をもう片方のある場所に転移させる。
複雑な式とかは使用してないから魔力は外に漏れないし、魔力が漏れないから移動位置もわからない。」
「へぇ、すごいじゃないか。」

もっと誉めてくれてもいいかな。
因みに欠点は魔力を大量に消費しないとつくれないこと。
さまざまな条件を無視するのに砲撃一発分の魔力が必要だった。
だから渡したのは一人三セット計十二枚。
正直コストパフォーマンスがヤバい。
割に合わない。

見る人が見れば驚くのかもな。

「一応これも。試作品ゆえに効果は未知数。」

念のために渡すのは閃光を発する札。
気が付いたら出来てた不思議な札。
恐らく二度とつくれない。

「適当にやったら出来た閃光符だ。
最低でも閃光手榴弾（フラッシュバングレネード）くらいの威力だから、近くで破らないように。」

でも失明や聴力を失ったりはしない…はず。確証は残念ながら持てない。
試したことないし。

「適当ってのが気になるけど…まあいいや。貰っとく。」

お前が取るのかよ。

「だってフェイトは戦闘中両手ふさがってるもん。ならアタシが使うさ。
…ところで、これ遠隔発動できないのかい？　破らないと発動できないのに近くで使うな、おかしいだろ？」

確かに。
でも、ルーン文字をいくつかだが使える俺と違って二人は全くの素人。
Fを刻（アンサズ）めるなら話しは違うんだけどねぇ。
ん？　起動キーを設定すればいいのか。
意外に簡単だったな。

一旦札を返してもらってFを書き込む。
そして術式をちょいと書きかえた。

「ほい。起動キーは『スタン』。
投げて使える。」

あっという間に書きかえた俺の技術に驚いたのか、目を見開いて固まるアルフ。
フェイトさんは金色のペンダントに札を読み込みさせていた。
なんかペンダント喋ってる。あの杖と同じタイプのか。

って、「ｓｉｒ」っつってるぞ。いいのか？
それ男性の上官への敬語なんだが。

「そろそろもう一個の切り札紹介していいか？　あんま時間ないんだ。
そっちもジュエルシード集めしなきゃいけないんだろう？」
「確かにね。こっちもあんまり時間に余裕はない。ちょっと急いでくれるかい。」
「すみませんがよろしくお願いします。」
「ＯＫ任せろ。じゃあいこう。まずはキュベレイから。
ふたりとも盾作ってくれる？」

疑問に思ってはいるが、従ってくれる二人。結構素直なのね。
二人が金色と緋色の盾を張ったのをみてから、ある魔眼を発動させる。
右手でまぶたを覆って目を閉じる。
目が変化したのを確認してから瞳を開く。

「魔眼『キュベレイ』。」

現世に放たれた神代の魔眼は、目の前の獲物を石化させるべく、まずその直前にある障害から牙を剥いた。
未熟な魔導師が張った魔法壁ごとき、石化させるのに五秒もかからず完全に石にした。
端まで石になった盾は、跡形もなく砕け散った。
崩れたとたん砂ほどに粉々になり、そして消滅した。

二人に危害を加えるわけにもいかず、目の力が届く前にキュベレイを無理矢理止める。
実は石化の魔眼を止めるのにはいくつか工程が必要なのだが、俺は直死の魔眼に切り替えてから、直死をやめることによって失明のリスク無しに止めている。
この工程に約二秒。お手軽。

「な、なんだい今の！　盾が石に！？」
「瞳の形が変わったような…」

びっくり仰天、飛び上がるアルフ。
少し主人を見習え。
ほら。フェイトさんは冷静にキュベレイについて考え…震えてる？
恐いよな。
俺だってこんな目持ったやつに出会ったら全力で逃げるわ。

「ギリシャ神話のメデューサって知ってる？　これはそいつの目なんだけどさ。
本来目を合わせたら石になるっていうののはずなんだよ。けど俺の目は見た大抵のものや人を石にするんだ。」
「こりゃまたずいぶん恐ろしいもの持ってるね…。敵にならないでおくれよ？」

「善処する。」
「じゃあ今日はもう遅いし、これで解散しませんか？　なにかあったら連絡しますので…。」
「りょーかい。俺ん家隣だからチャイム鳴らしてくれ。家族いないし大丈夫。」
「わかった。じゃ、また明日。」

こうして二人と別れ家に帰った。
っていっても隣だけどね。

「ただいま。」
「遅かったな。で、どうだった？
聞くまでもないか。」
「ああ。協力関係になった。
これで安心だな。」

これでしばらくゆっくり過ごせる。
ところで、そのニュース。気になるな。
アルテミスの見ているテレビから流れるニュース。どーも怪しい。

『今日未明、海鳴市在住の●●さんが、自宅で死亡しているのが見つかりました。
●●さんの自宅には鍵がかかっており、警察では連続変死事件とにか関わりがあるとみて、調べを進めています。
変死事件は今月で七件目となります。』

嫌な予感しかしねぇ。
なんか…厄介な事になりそうだな。

その１２　俺の（心が）泣く頃に。（後書き）

次回、Ｌｅｒｏｙさん、出番ですよ！！

あ、まだまだ転生者募集中です。

どんどん送って下さい。

その１３　殺人貴≠殺人鬼（前書き）

さて、今回登場するのはＬｅｒｏｙさんが考えてくれた転生者です。
皆さまも応募して下さいねー☆

その１３　殺人貴≠殺人鬼

転生者にも色々ある。

原作を守り、あまり関わらないもの。
これは俺だ。
原作は知らないが、あまり動かず道筋を変えない。

次に、原作を守るが悪い運命を変えようとするもの。
これはこの前会った竜という剣製の少年に当てはまる。
結果的にだが、このパターンが一番幸福な終わりかたーー俗にいうハッピーエンドーーになりやすい。
人を助けたり救ったりするものには多くの協力者が付くからだ。

そして完全に原作を無視するもの。
タチが悪く、対処はしやすいが大変な場合が多い。
これは原作を知ってるか知らないかにもよるが、「この世界は架空のものだ。なら何したって問題無い。」等を思ってしまったものがよくいる。
それらが原因で原作ブレイクをしだす。
ためらいのない人間が割合高いためにキャラクター殺しもいとわない輩もいる。

さて、これまでの話しで俺が何を言いたいかというと、
最近多発している連続変死事件。
犯人は転生者なのではないかということだ。
周辺にいた警察官に話しを聞いたところ、死体には、現代科学の全てを使っても謎の傷口、そして死因は一切不明とわからないことだらけだそうだ。

何もかも不明となれば、これは十中八九転生者の犯行だ。
指紋、さらには足跡等の証拠を全く残していないとくれば、それなり、若しくは相当経験を積んでいる。
というか足跡がない時点で魔法使いだ。
それなら証拠が無いのも納得だわな。
どこの暗殺者（アサシン）なんだか。
地球の人間には捕まえられないよ。

今、俺は危険を承知で封鎖されたマンションに来ている。
封鎖の理由は死者が多く出て、取り壊そうとしたが何故か事故が多発しやむを得ず立ち入り禁止にしたという曰く付きのマンションだ。
誰も近付かないことから、怪しい人物が潜むにはぴったりの場所だ。
時間も夜遅く。
これ以上の機会もない。
出会える確立はだいたい五分五分。
しかし、俺はここにいると確信を持っていた。

「出てこいコラー。さもないとマンションごと壊すぞ。」

左手に百均で買った懐中電灯をもち、辺りを照らしながら進む。
右手にはリアクターとやらのナイフ。
ハルバードだとがさばるので今回はお留守番。だって2．5メートル。冗談じゃない。
別に札で喚べるから大した問題でもない。
かれこれ一時間探索しているが、いまのところ人の痕跡はない。

ほこりだらけの床にも足跡はない。
困ったもんだ。

と、急に空気が変わった。
違和感、いや誤差の範囲内レベルだが気になる。
暗殺者らしき相手と殺し合いするかもしれん。ちょっとのミスが即、死に繋がる。

一歩一歩、足音を消しながら回りの音や気配を探る。
それでも居場所はわからない。

考えろ。
俺が向こうの立場だった場合、どう襲撃するか。
己を極限まで周囲と同化させろ。
決して悟られるな。
そして、殺るなら一撃でーー

首を狙え！！

キィン！！

甲高い金属音が奏でられた。
俺のナイフと相手のナイフが重なった音だ。

懐中電灯なんてのはとっくにもってない。
だから敵の姿はわからない。
しかし俺には直死の魔眼がある。
これなら暗闇だろうと盲目だろうと死の線が見えるために大まかではあるが相手の動きがわかる。

「ようやく会えたってのに、挨拶も無くいきなり殺しにくるかねぇ？」

ナイフでつばぜり合いをしているため二人の距離は限界まで近い。
だからわかるのだが、こいつはアクセサリーをなにか付けてるらしくじゃらじゃらうるさく音がする。
これでよく気配消せたな。
普通わかりそうなもんだが。

ま、いつまでもつばぜり合いが続くわけもなく、重い一撃で遠く離れる双方。
まずった。また隠れられる。

「待てやゴラァ！！」

素早く闇に消えた敵に追い付くため全力で走る俺だが何故か見失ってしまった。
こりゃ本気でマンションごと崩す必要があるかね。

エレベーターに乗ろうとした俺は壁に血文字があるのを見つけた。
『屋上にこい』だとさ。
罠なんだろうけど行かなきゃいけないよなぁ。めちゃくちゃ行きたくねぇよ。
出オチありえるよこれ。

嫌な予感しかしないので、飛んで行くことにした。
こっちの方がよっぽど安全だ。

屋上につくと、一人の人間が月夜に照らされてたたずんでいた。
髪と瞳は血のように紅く、肌は異常に白い。
服装は真紅と金色のトレーナー、そしてジーンズと、とても暗殺者には見えない。
乱雑に切り揃えられた髪型と中性的な容姿のせいで男女の区別がつかない。
一応体格からするに男のようだが…。

「待った？」

フェンスを乗り越え笑って近付く。

「待ってなどいない。」

予想外の渋い声。ギャップ萌えありそうだね。

「一個聞きたい。何人殺った？」

ここで言ってるのは転生者の数だ。
七人中、何人が転生者だったか。

「二人。魔導師と召喚師だったが、どちらも相手にならなかった。」

へえ。ベテランじゃないか。
勝てるかどうか怪しくなってきた…。
でも、敵前逃亡はカッコ悪い。
せいぜい油断してろ。

「お前は…どうだ？　手応えがあるといいが。」

人を見下すとか。死ね。

「どちらにせよ……。」

姿が消えた。マズイ！！

咄嗟に札を破りハルバードを喚ぼうとした。

が、向こうの方が圧倒的に早かった。

耳元で声が聞こえた。

振り向く時間も無かった。

「お前で……三人目だ。」

死神の鎌は、もう振り抜かれていた。

その１３　殺人貴≠殺人鬼（後書き）

次回から本格的な戦闘が始まります。
果たして、シオンはこのアサシンに勝てるのでしょうか？
こうご期待！！

その１４　真・屈折延命（前書き）

初めての本格的な闘い。
頑張りました。

その１４　真・屈折延命

先に動いたのは向こうだった。
全身に淡い灰色の光。肉体強化の証だ。
灰色は奴の魔力光か。特に拳を重点的に強化している。

徒手空拳での格闘戦をメインにする相手は、俺にとって相性が悪い。
何せ俺の獲物はハルバード。
リーチが極端に長い一方、他の長柄武器と同じように懐に入られると対処しづらい。

それに時間あたりの攻撃回数にも問題がある。
素手、というか両手バラバラの武器は最も速く、多く攻撃を加えられる。
逆に両手持ち武器は最も攻撃速度が遅い。
当たれば勝ちなのだから速さは必要ない…そう思っていた時季が、俺にもありました。

一撃の重さをはかるためにあえて初撃をリアクターのナイフの刃の腹で受ける。

「フッ。」
「こんなの…なに？」

人の拳の重さじゃない。
鉄球にも匹敵する重力。ただの強化魔法なんかとは比較にならない、最高クラスのもの。
マニアック過ぎてどのキャスターも覚えないような。しかしキャスターくらいじゃないと覚えていないような。

エミヤかこいつは。
まさか強化魔術に特化した身だ、なんていうなよ？
固有結界なんぞ持ってた日には、首を括るしかない。

「ずいぶんと魔導師らしくない魔導師だな、おい。葛木みてーだ。」

ナイフを振るう手を一切止めず問い詰める。
確かにそう言えばそうだ。
格闘術はよく見れば【蛇】だし、肉体を強化して戦うという戦法も葛木にそっくりだ。
…魔術が自前って点が違うものの。

「葛木という者が何者かはしらんが、私に似ているのか。複雑な気分だ。」

フェイントを幾重にも仕掛け、執拗に急所を狙ってくる。しつこいんだよ。
内心毒を吐くと、集中が一瞬途切れ手元が狂った。
その隙を逃してくれるわけもなく、頸動脈にどこかから出したナイフが走る。
長さが足りないと判断しての早業か。
隠し持っていたのは殺人鬼、もとい暗殺者として当然だろう。にしても予想外だ。
血管に刃がかすった。

危なっ！！

文字通り首の皮一枚で繋がった。
もし、あと少しでもナイフが長かったら死んでた。

冷や汗が止まらない。

「今のは惜しかった。もう3ミリだったのだが。」

「死ぬ気なんざさらさらねぇよ。

さっさとお前が死ねぇ！！」

今度は全力で突く。これなら弾かれはせよ多少のダメージは与えられるーーはずだった。

刃の先端部を相手のナイフの背、ギザギザの部分で止められ、そのまま回転される。

死んだ、かも。

俺はナイフを突きだし固まった状態。

しかし向こうはそれを避け、逆手に凶器を構えている。

無防備な俺（獲物）と必殺の間合いの殺人鬼（狩人）。

幸い心臓と頸動脈が狙えない体勢だが、だからといってどうにかなるはずがなかった。

容赦無く脇腹に刺さるサバイバルナイフ。

即座に引き抜かれ、傷口から吹き出す熱い血液。

「ぐああアッ！！！！」

反射的に傷口を押さえるが、いっこうにとまらない血。

内臓に刺さったかもわからない。

早く止血しないと…。

「トドメだ。今楽にしてやる。」

迫るナイフ。

この近距離では無理だ。

ならどうする？

「『F（アンサズ）』！！」

自爆覚悟で発する札の起動キー。
刹那、衝撃と閃光が俺の上着の右ポケットから起きる。
爆発はコンクリートの床を破壊し、俺の身体を吹き飛ばした。
偶然にも暗闇へ転がった俺は、そのままボロボロになった身体に鞭打ち走った。

さっきのせいで、もう瀕死だ。
出来るだけ遠くに…。

「…逃げたか。」

頼む、しばらく追ってくんな…！

畜生。
愚痴ってもなににもならないが、そうしなければやってられなかった。
治癒符は擦り傷程度しか治せないし、効果の高いものは爆発に巻き込まれ焼失した。

壁に手をつき必至に進む。
支えがないと倒れそうだから仕方ない。

つい先ほどの怪我の影響で、血痕が俺の通った道を示していた。
これで俺の居場所はもろバレだ。
目眩ましした意味が台無しだよ。

というかそろそろ出血で死ぬ。
家に速攻で帰りたい。けど札無いから無理なんだよな。

あ、なんだか意識が朦朧としてきた。

「ッ！！　こなクソがァ！！」

残る力を振り絞って魔力放出をする。
まるで高町の砲撃のようになった俺の魔力は、あのアサシンが来るであろう方向を薙ぎ払った。

それでも、それでも。
あの殺人鬼は向かって来る。

漆黒の闇のなか、揺らめく紅い瞳が輝いている。

「来るな…。」

コツコツコツと、足音がだんだんと近付く。
その距離が、俺の寿命そのものだ。
だから…。

「こっち来んなーーーーーッ！！」

それが零になった時、

「終わりだ。」

死ぬ。

手刀が俺の心臓を貫いた。

あまりにあっけない。こんなのが俺の終わりなのか？

「ごふっ。」

血を目一杯吐き出す。

脇腹、胸、口と全身が血に染まっている。

嫌だ。

死にたくない。

こんな死に方…嫌だ。

でも…なにも出来ない。

急激に意識が遠くなって……あ。

ブラックアウトした。

あれ…どういうことだろう？

瀕死なのは変わらないが、死んでない。
理屈も理由もなに一つ不明だが、まだ俺が死ぬのには早いということか。
なら、目の前の障害を排除するのみだ。

ポケットの予備ナイフを握り締めた。
殺す！！
少し時間が経ったのか、こちらに背を向けて立ち去ろうとしているアサシン。
ここしかない。

「うおおおお！！」

首に左の腕を回す。そして、

こいつがしてくれたように、心臓を貫いた。

「な……、」
「おっと。ありきたりな台詞は御免だぜ…！」
「殺したはずだ！！」

その状態でよく喋れるな。尊敬するよ。
だが…。

刺したナイフを捻る。

「！！」

さようなら。
わざわざ角度を変えて抜く。

既に死んだのかもう動かない殺人鬼。
念の為に焼き払う。

…。

人を……殺した…。
極限状態だったからか、そこまで抵抗は無かった。
ただ、失血したことも含めて冷えた頭が理解する。

恐い。
涙が出た。
血に濡れた腕が、心臓の感触が、とても恐ろしかった。
思わずその場で嘔吐する。
が、胃液しか出ず、何度も吐く。

「『アルテミス…』。」

念話を送った直後、今度こそ意識を失った。

その１４　真・屈折延命（後書き）

人生最初の殺人。
立ち直れるのでしょうか？

その１５　そうまでして生きる意味。（前書き）

一週三回更新にしようか悩む今日この頃。

その15　そうまでして生きる意味。

額に冷たいなにかが乗せられて起きた。
手で触ってみると濡れたタオルだ。
俺は風邪でもひいたってのか？
そんなわけない。
…ないはず。

まだ完全に覚醒していないからか、若干ぼやけて見える視界のなかには金色がどアップで映っていた。
金色を持つ知り合いは二人いるが、今のところこんなに優しく看病？してくれるものはただ一人。
てか紅い目でわかった。

「フェイト…？」
「起こしちゃいましたか、すいません。
今身体でおかしく感じる部分はありますか？　精一杯頑張って治したつもりなんですけど、あんまり治療魔法は得意じゃなくて…。」
「わざわざありがとう。ところでアルテミス…いや、フェイトと同じくらいの歳の女の子を見なかったか？　俺の上官っぽい立場のやつだから聞きたいことがあって。」
「アルテミスさんなら出かけましたよ。
何日か戻れない用事が出来たとか。
その代わり、私ができる限り説明します。　」
用事？　人が死にかけてるってのに、なんだ。
仮にも上位神だろ。無視しろよ。
「えっと…まず昨日のことから話しますね。

昨日の夜にアルテミスさんが訪ねてきたんです。
『シオンを助けてくれ』って。
事情を聞けば、大怪我を負った貴方を連れてきたけど助けられないらしく、私達にお願いしたそうです。
急いで行くと、リビングに血塗れの貴方が倒れていました。
急いで治療魔法をかけて治したんですけど、胸の傷だけはどうにもならなくて…すいません。」
「いや、治してくれただけで嬉しいよ。
にしても胸の傷？」

上着をめくって昨日、あの殺人鬼に刺された位置を見た。
縫ってくれたのか、ふさがってはいたが、ずいぶん大きい傷痕が残っていた。
こりゃ人前に出れないな、なんて思ったが、激痛で固まった。

「！！」
「駄目ですよ！　傷口が開いちゃいます！」
「ほんと迷惑かけてごめん。
ジュエルシード集めだってあっただろう？
こんな事の為に時間潰してもらって悪い。」
「いいんです。困った時はお互い様ですから。それに休憩の日でしたから。」

はにかみながら答えてくれるフェイトさん。
この子本当に天使だよ。
こんなふざけた状況じゃなきゃ告白してるね。間違いない。

「そう言えばアルフは？　まさかフェイト一人じゃないよな？」
「アルフにはキッチンでお粥作って貰ってます。食べれますか？」
「もちろん。」

しばらくして、アルフができたてのお粥を持ってきた。
多少不味くてもがまんしろ、と言われ差し出された、玉子入りのお粥はなんだか…とても懐かしい味がした。

転生する前、俺は立派な社会人だった。
彼女も奥さんもいなかった俺には、病気になっても看病してくれる人は誰もいなかった。
子供の頃、母親が作ってくれたお粥を思い出して、涙が溢れた。
困惑する二人に俺はただありがとうといい続けた。
こんなくだらないことが、とても嬉しかった。

その後、心配してくれる二人を、大丈夫だから、と言って強引に家に帰した。
一人で考えたいことが山ほどあったからだ。

まず初めにアルテミス。
フェイトさんの話しを信じるに、ここまで俺を運んだのはあいつだ。
なのになぜ治療はできなかったのか。

もしかしたら、転生者に直接手助けは出来ないのか。
なら今まであいつが口頭でのアドバイスしかしなかったのに納得できる。
用事、というのは運んだことに対する注意か。
面倒な決まりだこと。なくなれ。

ふと、昨日何故俺は死ななかったのかについて考えてみた。
あの時確かに心臓の刺され、倒れた。
しかし意識は消滅せず、油断して後ろを向いた殺人鬼をナイフでーー

急に、あいつの心臓を刺した感覚が蘇った。
刺した瞬間こそ意識してなかったものの、こうして自覚すると凄まじい恐怖が襲いかかってくる。

暖かい血に濡れた腕。
最初は硬く、そして柔らかい感触。
あの、怨みのこもった視線。

もう無理だった。
トイレに慌てて行き、蓋を開けたとたん嘔吐した。
胃のなかのものを全て吐き出す。
ついさっき食べたお粥も吐き、口の中に胃液の酸味が残った。

恐い。
やめろ。
そんな目で見るな！！

脳裏に焼き付いたその表情。
なんど振り払っても取れない。

落ち着くためシャワーに入るが、何度もフラッシュバックし嘔吐した。

身体も拭かず、布団に潜りこんだ。
ガタガタ震え、ろくな思考が出来ない。

いっそ死んでしまおうか。
そうさ。
こんな人間は死んで罪を償うべきなんだ。
生きるため仕方ないといいつつ、なにも成せず生きる。
こんなやつが生きていていいはずがない。

でも、死ぬ覚悟はなかった。

こんな、震えてトラウマに怯える日々が続いた。

アルテミスは、まだ、帰ってこない。

その15　そうまでして生きる意味。（後書き）

主人公はこんな人間です。
どっからどこまでも一般人であり、ろくに勇気もありません。
彼が強気で乱暴な口調なのも完全な強がりです。
仮面をかぶることでしか強い自分を見せられない。
だから今回みたいなことに耐性がありません。
これからに期待、といったところでしょうか。

因みに、今回の彼は、朝田詩乃をイメージしています。
なので、彼がどうなるかも、お分かりですね？

その１６　生きる理由。（前書き）

少々強引に感じるかもしれませんが、納得して下さい。

その１６　生きる理由。

初めての殺人から三日。
俺はいまだに立ち直れずにいた。
刃物や真っ赤な物体を見るたびに思い出すあの光景。
自分の意思とは無関係に身体が震え、吐き気をもよおす。
食事が作れないためインスタント食品を食べてはいるがすぐに吐いてしまうから結局食べていないのと同じだ。
嘔吐した回数は二桁を超え、俺はげっそりと痩せ細ってしまった。

フェイトに迷惑はかけられないからと、無理してジュエルシード集めを手伝うが、それが精一杯だ。
敵に顔が割れたくないという建前で顔を仮面で隠しているが、本当は顔色の悪さを隠すためだ。
この間一切遭遇しなかったのは奇跡といっていい。
もし戦闘なんかになったとしたら、あっという間にやられていただろう。
敵が未熟なのか、それともこっちが優秀なのか。どちらにせよ、助かった。

トラウマがいっこうに改善しない状況をマズイと思った俺は、回らない頭ながら記憶を封印しようかと考えた。
しかし俺は忘却のルーンも札も魔法も知らない。
なにも出来ず諦めることとなった。

ぐったりと寝込んでいたところ、アルテミスは今なにをしているのか気になった。
心配などでは断じてなく、ただ今は頼れる人が欲しかっただけだが。
またもや強くなってきた吐き気を抑えて、念話を試みた。

この三日、全く繋がらなかった念話が、若干のノイズまじりではあるものの、通じた。

『助けてくれ。』

『久しぶりの第一声がそれか。情けない。

どうせ人殺した感覚が残っててトラウマになってるとかだろ。』

驚いた。一瞬で理解された、いや、とっくに予想していたような口振りに。

『わかるさ。今までけっこうな回数この遊びに参加しているんだから。

私は前回までずっと女の転生者を選んでいたからよけいにだ。

女は心が弱いからな。現代人もか。』

ああそうさ。どうせ俺は心の弱い現代人だ。

人殺しなんて、ニュースや本のなかでしか知らなかったよ。

当たり前だろ？　そういう社会で生きてきたんだから。

『私は今自由に動ける状況じゃないんだ。

お前を家まで運ぶという『直接的な援助』を行ったからな。禁止されてる行為だ。

これだって隠れてはなしている。

だから手短にいう。

『生きる理由』を見付けろ。』

『生きる…理由？』

『そうだ。だがなんでもいいわけではない。

死にたくない、好きな人が出来た、叶えたい夢がある…。

なにがあっても揺らがない理由だ。

そのためだったらなんでもできるような。』

『…。』
『すぐに答えをだす必要はない。
思い付かないというのならヒントをやる。』
いいか？　外部に漏らすなよ？　と念を押される。
『この殺し合いはふるいだ。
この世界にくる転生者たちは、必ず罪を犯している。記憶は奪ってあるが。
全てを懸けて戦える、そして生き残れるやつに最後のチャンスを与える救済装置でもあるんだ。』
人の本質はそうそう変わらない。
だからほとんどの転生者は前世と同じ罪を犯すんだ、とアルテミスは付け加えた。
『いいか。お前はこのアルテミスが選んだ男だ。その程度のことに負けてもらっちゃ困る。
お前は、生き残れる。
救いようがないなら最初から選んでない。』
そうだな。異常なまでの処女神が、男を選ぶなんておかしいと思ったんだよ。
そんな理由があっただなんて。
『じゃあな。しばらくしたらまた会える。
それまでさようならだ。』
こうして、念話は終わった。

生きる理由か…。
気分は少し楽になったから、多少まともな思考が可能になった。

改めて考える。
そうだ。
俺は平穏な暮らしがしたいと思っていた。
それはきっと、ほとんどの人が願うこと。
でも、生まれや回りの状況しだいでは、不可能になる人間もいる。
例をあげると、生まれながらにして悪役と決まっている者。
主人公が掲げる正義というわけのわからないものに倒される彼ら。
そんな終わり、認めたくない。

正義と悪なんてものじゃない。
同じ正義のぶつかり合いとは誰が言った言葉だったか。
その通りだ。
悪役にも、叶えたい願いがある。
少なくとも、平和に暮らすというのもあるはずだ。

なら、俺はその未来が見たい。
善悪なんて関係ない。
そのようなものをまとめて壊して。
皆で笑いあえる未来が見たい。

あいつが言った、ハッピーエンド。
その中には悪は含まれているのか。
問い詰める。

俺は、犠牲の上で成り立つ幸せなんて嫌だ。
だから、そんな糞みたいな結末を目指す転生者を殺す。
そして、どんな手段を使ってでも幸せな世界を作る。

最初は、フェイトからだ。
救ってみせる。幸せにしてみせる。笑顔にしてみせる。
誰も泣かせない。
絶対に。

その１６　生きる理由。（後書き）

と、いうわけで、紫苑くんの（仮初めの）生きる理由が見つかりました。
これから、この、未来を見る、というのにはどうすればいいかを具体的に実行していきます。
お楽しみに。

ところで、このハルバードを見てくれ。
こいつをどう思う？

すごく…大きいです。

→
なんかごめんね。

番外編その１　転生者ステータス（随時更新予定）（前書き）

少ないけれど、勘弁して下さい。
一応、新規キャラクターが登場するたびに追加します。

番外編その１　転生者ステータス（随時更新予定）

１　我らが主人公
　葉月　紫苑

陣営　無関係→反時空管理局
登場時季　第一期
死亡　ー
転生前　社会人

性別　男
年齢　１４
特技　体が柔らかい
趣味　魔道具作成　お菓子作り
好き　優しい人　甘味
嫌い　偉そうな人
弱点　濃い魔力素

筋力　Ｃ　魔力　Ｄ　耐久　Ｂ＋
幸運　Ｅ　敏捷　Ｃ　能力　Ａ－

スキル　道具作成　Ａ＋＋
材料さえあれば、作れないものは存在しない。不老不死の薬でさえも。

●●●●　ＥＸ
擬似的な不死さえ可能とする能力。ただし代償は凄まじい。

担当神　アルテミス

一言
能力の上手い使い方を学んでこそ他人と対等という若干弱い部類の転生者。
しかしディバイダーを所持しているので、それが切り札となるのだろうか。

2　テンプレ正義の味方
　十六夜　竜

陣営　時空管理局
登場時季　第一期
死亡　ー
転生前　高校生

性別　男
年齢　１０
特技　殺陣
趣味　読書
好き　特になし
嫌い　反時空管理局
弱点　投影精度低下

筋力　Ｂ　魔力　ＥＸ　耐久　Ｄ
幸運　Ｄ＋　敏捷　Ｃ　能力　ＥＸ

スキル　無限の剣製
サーヴァントエミヤが持つものと同一。
しかし経験が少ないためか、所蔵量は劣る。

魔力無尽蔵

尽きることのない無限の魔力。故に魔力量を気にする必要は一生ない。

担当神　ヘファイストス

一言

最も主人公に合っている人物。

数多くの転生者がそうしたように、彼もハッピーエンドを目指している。

そのための犠牲は多少いとわない派。

3　異常な死神

ムザン

陣営　無所属

登場時季　第一期

死亡　第一期　葉月紫苑

転生前　連続殺人犯

性別　男

年齢　23

特技　解体

趣味　ナイフ収集

好き　悲鳴　恐怖

嫌い　正義感の強い人間

弱点　殺人後の強い倦怠感

筋力　C　魔力　E　耐久　D
幸運　B　敏捷　A＋　能力C＋

スキル　あらゆる殺人技術
古今東西ありとあらゆる殺人技術を持つ。
組み合わせも自由自在。
　上記のスキルを可能にする身体能力
高レベルの身体能力が約束される。衰えることは絶対にない。

担当神　ヘルメス

一言
転生前から殺人犯。
これまでに何人か転生者を殺害していて、ベテランレベル。
非常に目立つ格好だが、自前で気配遮断を所持。
最後まで生き残ってもおかしくなかった。

番外編その１　転生者ステータス（随時更新予定）（後書き）

因みに、こんな感じで転生者応募してくれると非常に助かります。

その１７　魔法対向ディバイド紫苑、始まります。（前書き）

遅れてすいません。
病気になりました。

その17　魔法対向ディバイド紫苑、始まります。

こんな状況になって初めて分かった。
なにか1つ、1つ大切なものがあれば人は戦える、と。

自分でも理解はしている。
ただ、なにもわからぬこの世界で見付けることが出来なかっただけ。

俺は今、自分勝手な願いのために人を殺して生きている。
免罪符になるなんて思ってはいない。
何の罪も無い、とは言えない極悪人だったが、それでも一人の命、未来を奪った。
仕方ない仕方ないと思いつつも、罪悪感は薄れることなく残っている。
あの転生者が最後にした表情が、自分を恨んでいるようで、恐ろしかった。

ありがちな言葉だが、生きることが償いだ。
殺した事実を否定せず受け止め、それを乗り越えるのが重要だ。

このことを徹夜で考えた。

そして、大切なものを探した。
今のところはフェイトだ。
彼女を助け、救う。

そう思ったら、気が楽になった。
少なくともまだ俺は戦える。
この程度で潰れちゃいけない。

自分の意思でイバラの道を選んだんだ。
だから…。
正々堂々、あいつを殺す。

…で。

「お前なに喰ってんの？」

夕方と夜の境、あたりが暗くなり始めた頃に俺はフェイトの家を訪れた。
ジュエルシード集めの為だ。
協力するといっておきながらしばらく参加できなかった穴を埋めようと、ジュエルシード探索に名乗りを上げたのだが…。

「こっちの世界の食事。なかなかおいしいじゃないか。」

待っていたのは箱に入ったなにかをひたすら貪り食うアルフだった。
人が覚悟決めた直後がこれかよ…。
てかそうじゃねぇ。この世界の食べ物ってのはわかってんだよ。
問題はその名前だ！
『犬元気』
どっからどうみてもドッグフードです本当にありがとうございました。
見た目で犬科の動物が入ってるのはわかるけどさ、流石に犬ではな

いだろう？
ライオンに猫じゃらしが効くように、その種類の動物は感覚が一緒なのか？
「それ、イヌ用だぞ。」
「え？」
箱のパッケージで分かれよ。
漢字読めなくてもそれくらいは大丈夫だろ。
「おいしいんだけどねー。食べる？」
「なら一口。」
パクリ。モグモグ。ゴクン。
…オエッ。
「人の食うモンじゃねえからこれ。」
「えー？」
そうか…。味覚が一部原型のものなのか。
なら仕方ないな。
「ところでフェイトは？」
そう言えばさっきから姿が見えない。
そろそろ時間じゃないのか。
「部屋で休んでるよ。」
「…怪我でもしたんじゃあないだろうな。」

「…起こしてくるね。」

一瞬黙った。
イコール怪我をしているということになる。
軽いものであればいいが。

数分後、バリアジャケットとかいうのを展開して降りてきたフェイトは、僅かに顔色が悪かった。

「どうした。」
「何でもない、大丈夫。」

大丈夫もなにも、鉄臭いんだが。
出血してるだろ。

「アルフ、原因は。」
「…。」

言っていいか迷ってる表情。
敵、高町や竜なら躊躇う必要はない。
そうなると…。

「まあいい。
心配だからこれを使っておけ。」

フェイトに軽症用治癒符を数枚重ねて手渡す。
いつまでも隠せる事情でもなさそうだ。
ならその時を待つさ。

「じゃあ、行くか。」

「はい。」
フェイトは飛行魔法を発動、アルフは狼フォームに、俺は足に強化魔法をかける。
屋上に立ち、飛ぶ直前、アルフにだけ聞こえる声でささやいた。
「あんまり溜め込むな。話して楽になることだってあるんだぞ。」
「…！！」
アルフは、なにも言わなかった。

7時ちょい過ぎ、ジュエルシードがあると思われる場所に近いビルに俺達は降り立った。
相変わらずの魔法の無茶苦茶さに驚く。
ジャンプ一回でビル飛び越えるとか。
筋肉痛が怖い。

「大体このあたりだと思うんだけど、おおまかな位置しかわからないんだ…。」
「ま、こんな都会じゃそうだよな。でも探す手段はあるんだろ？」
「うん。ちょっと乱暴だけど、周辺に魔力流を打ち込んで、ジュエルシードを強制発動させるよ。」

え。魔力流？
嫌な予感しかしない。
魔力流打ち込み→発作→／（＾Ｏ＾）／オワタ

…。
やべぇーーーー！！
死因が味方とか笑えない！！
なんか無いかなんか無いか！？

「待って。アタシがやる。」
「え、でも…結構大変だよ？」
「大丈夫。アタシを誰の使い魔だと思っ…紫苑どうしたの？」
俺のあまりの慌てっぷりに気がついたらしい。そりゃそうだ。

「ゴメン。俺、濃い魔力に弱いんだ。
だから少し下がってるね。」

そそくさと遮蔽物をさがして隠れる。
少しでも魔力を遮断できるアイテムは…。
そうだ、こんな時のためのディバイダー！
ちょうどポケットにリアクターのナイフが。

「そんじゃあ…。」

間に合え！

「行くよッ！！」「リアクトッ！！」

アルフからオレンジ色の魔力が発せられ、天候が激変していく中、
俺は俺で激変していた。
何となく魔力と違うんだなと分かるものが俺の中から溢れて、体を
包んでいった。

服が黒を基調とした軽装に変わり、手には手甲が。
持ってきていないハルバードが現れたかと思うと二つに別れて、1・5メートルくらいの普通サイズになって、両手に収まった。
二刀流…？
どんだけパワー重視のスタイルか。

取り敢えず、俺の変化が治まったからフェイトの元へ向かう。
一応魔力流の影響はない。無事だ。
上を見上げると、星が美しい空は漆黒の雲に覆われ、雷が止むことなく降り注いでいた。
どこの終焉だろう。
アーンド、街が白黒で出来た光景に。

なにがなんだかわからない。

「ねぇ。何が起きたか説明して。」
「なんだ、バリアジャケット展開できたんじゃないか。そうならさっさとすれば良かったのに。
えっと、この状況？
アタシが魔力流を打ち込んだら、その影響で天候が変わった。そしたら誰かが気づいて結界を張った。分かった？」
「分かった。」

すると光の柱が天高く走る。

「あれか。」
「でも、近くにあいつら（●●●●）もいるみたいだね。どうする？」
「邪魔者は任せろ。蹴散らしてくれよう。」
「お願いします。…アルフ。」

「あいよっ。」

二手に別れて走り去る。
フェイトはジュエルシード捕獲へ。
俺とアルフは邪魔者の迎撃に。

しばらくたたないうちに遭遇した。
片方は結界を張ったかもしれないフェレット。
そしてもう片方は…。

「よう。久しぶり。」
「またお前か…！　今は急いでるんだ、道をどけろ！」

転生者、なんとか竜。

「正義の味方お疲れさま。大変だろ？」

皮肉って言ってみる。で案の定キレられた。

「うるさい！　お前はこの物語を壊すつもりなのか！？」
「物語なんか知らねーよ。
決めたんだ。俺はフェイトを救う。
取り敢えずそれが現時点での最重要事項だ。
誰にも邪魔させん。」
「なら、俺と協力して…。」
「却下。」

論外。衛宮のような心もないのに理想を口にするな。

「その意見を通したいってんなら、戦え。そして殺せ。勝った方が正義だ。
それが全国共通のルール、だろ？」

デジャヴだな。前もこんな感じだったかも。

「来いよ、正義の味方ァ！！」
「クソッ！　こんなやり方で…！！」

戦いの火蓋が切って落とされた。

「投影（トレース・オン）開始！！」

その１７　魔法対向ディバイド紫苑、始まります。（後書き）

友人から、転生者一人追加。
明日あたり、リストに載っけときます。

その１８　切り札の一端、闇の書の力（前書き）

ヴァイスシュヴァルツポータブル、発売まであと４日！！
待ち遠しい。

その１８　切り札の一端、闇の書の力

竜の両手に現れたのは刃引きされた陰陽夫婦剣。
刃引きだと？　嘗められたものだな。
まさか俺を殺さずに捕まえようなんてことを思っているのか。

甘い。そこらの少女なんかよりもずっとな。
冗談ならともかく、本気でやってんなら笑ってしまう。
だって、明確に殺しにきている敵を殺さないように戦うっていうことだぞ。
ふざけてんのか、それともよっぽどの偽善者なのか。

俺らの戦いが、そんな生易しいもんじゃないってことをその身に刻んでやるよ。

まずは片方のハルバードを投げつける。
二つ武器があるとはいえ、躊躇なく投擲するなんてどうかと思うだろう。
だが、このハルバードにはとある便利な機能が付いている。

ーーガキィン！！ーー

金属のぶつかりあった、鈍い音が聞こえた。
どうやら双剣を重ねて十字をつくり、ハルバードを弾いたらしい。
普通はそうするよな。だけどこの武器では、それはやったらいけない。

なぜならこの双ハルバードはどちらも俺の手に握られている。
柄の端に鎖が付き、両方とも繋がっているからだ。

そして投擲したときの鎖の伸び具合をみると、恐らく伸縮自在。
リーチなんざ完全無視して攻撃が可能となる。
なので、重い一撃で体勢を崩した竜に対して二本のハルバードで追撃ができる。

「呆気なくその首刈らせて頂こうかッ！」

トラウマ再発なんか気にしてられない。
最初から殺しにかかった。
頭と体を分離させるべく、二刀の槍斧が迫る。
竜がとっさに盾にした干将・莫耶はあっさり破壊され、勝利は確実と思われた。

「『Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ　（体は剣で出来ている）』」

その言葉を唱えた瞬間、桃色の七枚の花弁が展開された。
投擲物に対して絶対的な防御を誇る概念武装、アイアス。
花弁一枚で古代の城壁に匹敵するといわれるその盾は、三枚花びらを散らせながらも俺のハルバードを防いだ。
流石宝具。詠唱破棄＆ａｍｐ；通常攻撃でこの硬度か。恐れ入るね。
で、一時的にとはいえ動きの止まった俺を無視してくれると思っていた、んだが。
そうそう上手くいかないってか。
ご丁寧に弓まで投影してさ。
実は殺傷する気まんまんだろお前。

「避けられるか？

『赤原猟犬（フルンディング）！！』」
「あぶなっ！！」
すぐに体をひねったからいいものの、一歩間違えれば胴体に風穴ができていた。
避けたっていっても、少し後ろで紅い矢が旋回して恐ろしい速度で向かってきている。
死ななければいいとでも思ってんのかこのクソガキ。
でもちゃんと対抗手段は用意してあるので、べつに心配する必要はない。
まずはリアクトしたこの体がどれくらいの強度を持つかのテスト。
矢に真っ直ぐ手のひらを向けた。
そして、接触するかしないかの距離になったその時。
「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）。」
爆発した。
予想外の出来事に多少動揺し、受け身も取れなかった。
だが瞬時に立ち上がりこれからくる攻撃に備え迎撃体勢をとった。
次の瞬間、起こる黄金の煌めき。
確か…この光は…。
「喰らえッ！！」
降り下ろされる『勝利すべき黄金の剣（カリバーン）』。

しかし悲しいかな。煙幕とあまりにも眩しいその光が、獲物ーーこの俺を捕らえることを難しくさせている。
おかげさまで、彼の大英雄ヘラクレスをも打ち倒す一撃は空振りで終わった。
本人は気付かない。
そもそもカリバーンは光の斬撃を放つ剣。
手応えなぞ感じるはずがない。

さて、俺のすぐそばで荒い息を吐くこの野郎。一体どうしてくれようか。
不発っつっても余波の衝撃波でハルバードが片方壊れた。痛いねぇ。
取り敢えず実験台だな。

部屋から一冊のある本を喚び、起動させながら同時に捕縛機能のある札を投げつけた。
魔力の縄が全身を覆い、まともに動くことさえ出来なくなる優れものだ。
あっという間にがんじがらめになった竜を見下して言う。

「さあ。お仕置きの時間だ。」

竜の下の地面(コンクリート)が黒く染まり、それに応じてだんだん体が沈んでいった。

「な、なんだこれ！？　体が飲み込まれていく！！」
「そのまま沈め。抵抗するな。」
「ふざけるな！　今すぐ止めろ！！」
「却下。」

少しずつだが確実に沈むこの黒い穴。

切り札の一つ、その効果の一部なのだが、なかなかいいじゃないか。
流石、王の力だ。

もう下半身が埋まった。
まだ縄がほどけないらしく、体をよじらせるくらいしかできていない。

「諦めろよ。どうせ終わりなんだか…ん？」

前見たように、空を貫く一本の光柱。
ジュエルシードが発動してるな。
封印はどうしたんだ。
まさか、なにかあったのか？

「良かったな、命拾いして。」

無様なクソガキがこれ以上飲み込まれないように途中で止めた。
決して無くしてはいない。
しばらく邪魔者は退場だ。

「待てっ！」
「待てといわれて待てバカはいない。」

全速力でフェイト達の元へ向かった。

二人の魔法少女は、お互いに杖を破損させ、動けない状態だった。
フェイトはバルディッシュを待機モードに戻すと、ジュエルシードへ駆けていった。

素手で封印しようというのか！？
慌ててフェイトの目の前に降り立つ。

「無茶すんな。困ったら頼れ。」
「でも…。」

魔力流で今にも失神しそうだ。
だがここで意識を失ったら、誰がジュエルシードを封印する？
高町かフェイトだ。
どっちもだめだろ。
だから、ちょっとくらい格好つけさせてくれよ。

手甲に包まれた手で、ジュエルシードを掴み、無理矢理押さえつけた。

暴力的なまでの魔力が俺を襲う。
心臓が異常な鼓動を鳴らし、立っていることすら危うくなる。
手から血が吹き出す。
視界がぼやける。
それを気力で我慢し両手で包む。

「封印を。」
「だ、だめです！　速くその手を離して！
　血がそんなに出て…。」
「速く！！」

怒鳴ってしまった。ごめんな。
でももう持ちそうにないんだ。

フェイトが手を俺の手の上に重ねて封印を始める。

「止まれ…。」

もう少し…！　もう少し持ってくれ！

「止まれ、止まれ、止まれ、…止まって！」

最後の声がした後、ジュエルシードはおとなしくなった。
それと同じタイミングに、俺も倒れた。
アルフがかけよってくるのがうっすら見えた。

「アルフ…頼んだ…。」

ジュエルシードを絶対に落とさないようきつく握りしめて、そして
意識を失った。

その１９　知らない天井って言うけど、普通天井に大差ないよね。（前書き）

眠い。
頑張った。

その１９　知らない天井って言うけど、普通天井に大差ないよね。

俺は倉庫にいた。
広大な倉庫だ。四方の壁が見えない。
ところ狭しと物が置かれている。
とても十年ニ十年で集められる量ではない。

その一角に、俺がよく知る人物がいた。

『嗚呼…やはり私のコレクションは素晴らしい…。キミもそう思わないかね？』
『なんでお前が…。』

こいつは、存在しないはずなのに…。

『おかしな事を言うね。これは君がみている夢だ。なら、誰がいてもおかしくないだろう？』

夢…？　いや違う。こんなリアルなのは俺の想像なんかじゃない。
ならまさか…。

『俺が本を使ったからパスが繋がったのか？』
『その通り。私もこの本を使う者が現れると思わなくてね。出てきたんだ。』
『だがお前は肉体も魂も消滅したはず。』
『私の魂の残りカスとでも言ったところか。
執着心の強い私だ。ありえない話しじゃあないよ。』

辺りを見回す。するとやっぱりあった悪趣味なティーカップ。生涯

綴られた日記。
本当に本人なのか。

『なら、何をしに来た？』
『警告…だよ。
せっかくの同志だ。私と同じ運命を辿ってほしくない。』

余計なお世話だ。

『今はまだ仮契約のような状態だからいいものの、本契約は比較にならない苦『うるさい。』』

俺の思いも知らないくせに、いちいち口を出すな！

『これは俺が決めた事だ！　自分の事は自分で決める！』
『だが…。』

「指図するんじゃねぇーーーー！！」

…目が覚めた。
寝言を言ってしまったようだ。恥ずかしい。

ここはどこの家だろう。
ウチに似ているが装飾が若干違う。
ダメだな。頭が回らない。霧がかかってるみたいだ。

ふんわりした高級ベッドを降りて部屋を出ようとして、

「いてっ。」
「うえっ。」

誰かとぶつかった。

アルフだった。
どうやら奇声を発した俺に驚き固まっていたところに衝突したらしい。
というか看病してくれていたっぽい。
丁寧に包帯が巻かれていた。

「すまん。ぼーっとしてた。大丈夫か？」
「あ、ああ。平気。それよりそっちこそ大丈夫かい？　急に倒れたから心配したよ。」

二度目なので馴れた。うん、嘘。
心臓痛い。

「ところでジュエルシードは確保できたか？
覚えてない。」

封印終わったところまでは意識あったと思う。
そっからは知らん。

「なんとかね。あのガキがいなくて助かったよ。」

無事に捕縛し続けられてたのか。良かった。

「あ、そうだ。今日、フェイトの母親のところに報告しに行くんだけど、来てくれないか？」

「協力者だからか？」
「それもあるけど、もしものためにさ。
アタシじゃどうにもならない事もあるから。」

虐待の可能性が出てきたな。
それでもフェイトが従っている理由が不明だ。
親だから、じゃあ片付けられない。
何故だ？

「わかった。いつ出発だ？」
「そろそろ行こうと思ってた頃さ。
屋上に行くよ。」

フェイトの親。一体どんな人物か。
狂人って線も捨てきれない。
交渉の余地があるといいけど。

屋上。
フェイトが黄金の魔方陣を展開していた。
これが転移の魔法だろう。
てっきりこの世界か、通信だと考えてたが、別の世界とはな。
次元座標がどうたら言ってたしな。

フェイトは俺が来たら、とても驚いたが自己紹介するためだ、と説明したらなんとか納得してくれた。

「次元転移。
次元座標、８７６Ｃ４４１９３３１２Ｄ６９９３５８３Ａ１４６０

７７９Ｆ３１２５
開け、誘いの扉。
時の庭園、テスタロッサの主の元へ。」
…何語？
＆ａｍｐ；座標長い。
きっと俺には一生理解できない分野なんだ。
諦めよう。
で、魔方陣から迸る光に包まれたかと思ったら、次の瞬間巨大な…
城？にいた。
便利。
後で教えてもらおう。
やっぱり無理。ダメだ、理解ができない。
東京ドームよりもっと広い家の中をフェイトとアルフ…はついていってるだけか。
迷う事なく進んでいる。
自分の家だから当たり前か。
アルフは終始なんか嫌そうな表情だ。
予想は的中して欲しくないが、どうだ。
西洋の城なら王の間とかって名前が付くであろう部屋のドアにたどり着くと、フェイトは俺とアルフに、ここで待てと言った。
待つこと数分、響く鞭を震う、空気が裂けるの音。人に当たる音。
予想的中だよクソがッ！

「アルフ、ここで治療の準備だ。
俺は交渉してくる。先に帰ってくれ。」
「待って！　一体なにを」
アルフの制止を無視して扉を速効で召還したハルバードで斜めに切断、蹴り破った。
そこにはやはり、空中に枷で動けないようにされたフェイトが。
背中は痛々しい裂傷で血だらけになっている。
隣にいたのは黒髪の女性。
見た目からするにこいつがフェイトの母親だ。
「お前…何をしている？」
攻撃もされずにフェイトを救出できた。
かなりの強度を誇るバリアジャケットが無惨な有り様に。
どれだけ打てばこうなるんだ…！
「なにって…躾よ。
これだけのジュエルシードしか集められなかったから、もうしないように体に刻み付けてあげているの。」
「これだけ…だと…。
それが愛娘に言う言葉ととる態度か！」
血相を変えて入ってきたアルフにフェイトを渡す。
頼んだぞ。
「少し、話し合う必要があるな。」
落ち着け。ここで手を出したら全てが台無しだ。

俺の、交渉力が試される。

上手くいけばいいが。

やるしかないか。

その１９　知らない天井って言うけど、普通天井に大差ないよね。（後書き）

部活の作品が大会に間に合わなかったでござる。
笑えん。

その２０　狂気の瞳（前書き）

一日遅れで更新。
気を付けよう。

その２０　狂気の瞳

「そう言えば自己紹介をしていなかったな。
俺の名前は葉月紫苑。わけあってフェイトの協力者をしている。」
「…プレシア・テスタロッサよ。」

同姓ってことはやっぱり親子。
髪の色がぜんぜん違うから、血が繋がってないとかか？
でもそんな理由で虐待まで至るもんか？
謎は深まる一方だ。

「フェイト達はこの世界から出ていったから自由に話せる。
…教えてくれ。なぜフェイトを嫌う？」

憎悪にも等しい感情は、どんな事情があれど娘に向けるものではない。
それにはよっぽどの理由があるハズなのだ。

「あなたなんかに話すことじゃないわ。
さっさと出ていきなさい。邪魔よ。」

さもなければ…と片手に持つ杖から紫電が撒き散らされる。
おおこわいこわい。

即死する強度の電流か。
つまりそれほどこの魔法使いは強いということ。
正直格が違う。
文字通り消し炭にされる可能性もある。
慎重に…慎重に…。

「モチベーションやその他もろもろに関わる。
それに、目的次第ではジュエルシードを使わずに達成できるかもしれない。
俺にはその力がある。」

少し躊躇う様子になった。あと一歩か。

「自己ブーストに使えるジュエルシードの数次第だが、」

一回区切る。

「『死者蘇生』も可能だ。」

その時、プレシアの表情が激変した。
希望を得た、そんな顔。

わかりやすい願いだ。
死者の復活か。
古来から余多の人間が願い、叶えようとしたもの。
決して叶うことないとわかりきっていても、思わずにはいられない。
自分の全てを捧げても取り戻したい。

プレシアの場合、夫かフェイトの姉もしくは妹だろう。

「誰を…失った？」

辛い面持ちになり、唇を噛むプレシア。

「アリシア…私の娘よ。」

それから、口外しない。裏切らないを条件に教えてくれた。
若かった頃、事故に巻き込んでアリシアを死なせてしまったこと。
アリシアを蘇生させようとしていること。
そして、フェイトについて。

「アリシアを失ったあんたが絶望するのはわかる。大切な人を失う哀しみってのはとても辛いことだしな。
だが、フェイトになぜあたる？
あんなに尽くして、苦しくても文句一つ言わない。純粋にあんたを愛してる。
なにが気にくわない？」

見ていてこっちがつらくなるフェイトの献身っぷり。
それなのに。

「全部よ！」

病人のような見た目からは想像もできない、力強い声。なにが原因だ。
というか全部だと？

「アリシアのニセモノのくせして！
アリシアと同じ顔、同じ目なのに全くの別物、そしてなによりあの魔力光が許せない！！
あの子は私とアリシアを引き裂く悪…ゲホッ…ゲホゲホ…。」

急に咳き込むプレシア。
喘息でも持っているのか。

薬はないし、困ったな。
治癒符でも貼っとくか。

「平気か？」
「別に…いつものことよ。」

手の甲で咳と一緒に出てきた血を拭った。
いつも…か。重度の呼吸器障害だな。
俺にはどうしようもない。残念だが。
もう長くはもたないのかもわからない。
どうしても成功させたいって訳か。

しかしこれからのことを考えるとプレシアには死んでほしくない。
絶対にフェイトが悲しむ。
別れ際にこの暴言を吐かれたら、精神崩壊の可能性もある。

なら、竜に病気を治してもらい、なおかつ死なせない。さらに仲直りをさせる。
高難易度すぎだろ。

「ところで、アリシアの蘇生が目的なら、その方法はあったのか？
どんな技術でも人間の蘇生は不可能だったように思えるのだが。」

そう。一番の問題点はこれ。

『蘇生は不可能』。

なにをどう頑張っても、時間が経った死体を甦らせるのは無理だ。
神の一人は成功したが、その罪として殺された。
ゲームの世界でも、死んだ直後の者しかできなかった。

絶対を覆す秘術が、存在するとでもいうのか？
「『アルハザード』。」
「なに？」
「『失われた世界　アルハザード』。
そこには、死者蘇生や時間を遡る秘術が存在するというわ。
ジュエルシードを使ってそこに行こうと考えていたのよ。」
「確証はあるのか。」
「当たり前じゃない。座標は特定してあるわ。」
「俺がいてもいなくても変わらないってことか。」

なら、本来のストーリーは最悪の形で終わるってことなのね。
プレシアはアルハザードへ消え、フェイトは絶望し、高町はなにもできなかった。

気付けてよかったよホントに。
まだやり直せるからナ。

「わかった。あんたがそういうなら好きにすればいいさ。ジュエルシードはまだ残っている。
全てが集まった時に選べ。
だがな、プレシア・テスタロッサ。
フェイトはあんたの娘であって、物じゃない。
それに、」

両断した扉の残骸を踏み砕き、帰ろうとしながら言った。
精々凝り固まった心の壁を破る楔になってくれ。

「アリシアの妹だ。

もしアリシアの魂がこの場所にあったら、フェイトを見捨てるあんたをどう思うかね。
失ってからは遅い。よく知ってるだろ？　フェイトも同じだ。
後悔しないようによく考えておけ。」

帰ってくる言葉をまたずに部屋をでた。

過去を乗り越えてこそ人は前に進めるんだ。
アリシアを生き返らせたとして、その後の未来はどうする？
フェイトって宝物がある。
それに気づいてくれ。

現在、ジュエルシードは四つ。
俺の蘇生魔法の最低限まであと五つ。
時間は、あまり無い。

その２０　狂気の瞳（後書き）

特に無し。

その21　MELTY　REASON（前書き）

ただいま。
色々な事情があったから遅れた。
これからは通常更新なので安心して。

やったねタエちゃん！
頻度が増えるよ！

その21　MELTY　REASON

その日は、とても目覚めの悪い朝だった。
何故か気分が悪く、体調も若干すぐれない。
風邪でもひいたのかと思った。
だが、頭の中にモヤモヤしたイメージが残っていた。

きっと嫌な夢でも見ていたのだ。
どうせ、あのじいさん（本の元持ち主）が俺にまた干渉してきたのだろう。
思念体のくせに、うざったいな。

頭を振って僅かに残った夢の記憶を捨てて、寝室からリビングに行った。
途中寄った洗面所で顔を洗ったことで完全に覚醒した俺は朝食を作り始めた。

てきぱきと調理を進めあっという間に洋風の朝食ができた。
マーガリンを塗ったトーストに、ソーセージを混ぜたスクランブルエッグ。
ミニトマトを盛り付けたサラダを食卓にのせれば、もう終了だ。

それにしても、手慣れたものだ。
アルテミスがいなくなってから食事を作る者がいず、結果俺が慣れないながらも作ることになった。
最初は黒焦げのダークマターを作ったものだが、数をこなせばなんとかなるもんだ。

一人、それも朝食となれば時間はあまりかからない。

ものの十分で食い終わり皿などを片付けた。
そして沸かしたお湯で緑茶を作り一息ついた。
紅茶やコーヒーは飲めない。

さて、今日はなにをしようか？
フェイトとの予定は午後だし、作らなければいけない札や魔法具もない。
掃除はこの前やったから、本格的にすることがなくなってしまった。
困った。
出かけようにも、他の転生者と出会う可能性があるからできない。

いっそ二度寝でもしてしまおう。
魔力も回復する必要があったし、ちょうどいい。

そういえば、食べてすぐに寝ると牛になるというが、今日くらいはなってもいいと思う。

ベッドに入りすぐに睡魔が襲ってきた。
ああ、お休みなさ

じゃない！
すっかり忘れてた。
本契約。
あの本をまともに使えるようにしないと。
かなりの時間がかかるから、今のうちにやっておこうと思っていたのだ…が、あぶないあぶない。
材料の調達や門の作製の合計時間を考えると、もう猶予は無い。

思い立ったらすぐ行動。

さっそく指を浅く切り血文字で印を書き始める。
場所はこんどこそ防音、魔力結界を張った屋上、の隅っこ。
五体満足でいられるか…？
少し心配になった。

といっても、今日は召喚門の作製のみが目的だから、意外とすぐ終わった。
まあ約束の時間のちょい前に終わったってことは五，六時間経ったんだろうけど。

一般人が触れないよう保護の結界を張ったら自宅に帰って即シャワー。
急いで待ち合わせ場所に行ったらフェスティバルはもういた。

「すまん、遅れた。」

五分前だが。

「平気です。私もついさっき来たところですから。」

絶対嘘だ。でも言わないのがこの子のいいところ。

今回は、前みたいな強引な捜索じゃなくて普通に探すらしい。
でも、もうある程度の場所はわかってるとか。
俺はいつも通り護衛＆ａｍｐ；転生者殺し。
俺のいる理由が本格的にわからなくなってきた。
アルフ一人でなんでもできる（支援封印戦闘など）から、竜を狙うくらいしか出番がない。

う～ん。嬉しいやら悲しいやら。

「それじゃあ行きます。」

あれ、そっちの空に大きな死の線が見える。
うっわ怖い。
戦艦でもあるんかね。
でも行かんわけにはいかないからどうしようもない。
宇宙戦艦なんてどこのバカが持ち出したのやら。
でもまあ、ここで歪曲の魔眼で潰せるけどあえてしない。
だって…そんなのつまらないだろ？

ジュエルシードの反応があった公園、一際目立つその中心の巨木に近付いた。
巨木はジュエルシードの力で活性化し化け物になっていた。
ファンタジーの世界に出てきそうなそいつは、今目の前で極光に飲み込まれた。

約束された勝利の剣（エクスカリバー）の真名解放だ。
間違いなく竜の放った一撃。
投影魔術で複製できる中で最強の宝具は、巨木が張ったバリアを紙くずのように破り跡形もなく破壊する。
残ったのはシリアルナンバーがわからないがジュエルシード。
圧倒的だな。

「フェイト、ジュエルシードを。
邪魔は一才させない。」
「…え？　あ、はい！」

そうしてフェイトが移動した結果、フェイト、ジュエルシード、高町が一直線に並んだ。
勿論間がジュエルシード。

「さて、苦労してもらって悪いが、あれは貰うぞ？」

竜。
お前は、もう、消す。
竜の方に俺自ら近付く。

エクスカリバーを真名解放した場所からさほど変わらないここで、
俺たちは武器を構えた。
竜はあの聖剣。俺はリアクターのナイフ。
両手で本人と同じ構えの竜、逆手で式や志貴と同じ構えの俺。
躊躇うつもりなぞ、無い、

「ふん。一足遅かったな。俺たちの勝ちだ。諦めろ、なのはが勝つぜ。」
「その自信は一体どこから来るのやら。
言っておくが、俺はお前なんか余裕で殺せるんだ。
直死で滅殺しておこうか。」

俺の能力の一つ、魔眼だけでもずいぶんたくさん手段がある。
直死、石化、歪曲、ギアスなど。

ギアスで奴隷にするのもいいし、記憶を消して使い物にならなくするのも面白い。

「ところで、高町になにか吹き込んだか？
目の色が違う、何かを決意した目だ。」

「なのはが一人で決めたことだ。
俺は相談にのっただけ。」

風に流れて声が聞こえてくる。

「……だけど…譲れないから。」

はっきりした声。まるで別人だ。

「考えたんだ。フェイトちゃんにも、ジュエルシードを集めなきゃいけない理由があるんじゃないかって。
だから戦うんだって。
…だけど、私はフェイトちゃんを助けたいの！」

…で？　だからなに？
正義の味方然とした言い方が不愉快だ。
首折るぞ。

「私が勝ったら…ただの甘ったれた子供じゃないってわかってくれたら、
お話し…聞いてくれる…？」

答えないフェイト。
心が揺れているのか。

無言で戦斧（バルディッシュ）を振りかぶった。
言葉はいらないというかのように。
もしくは、答えられないからか。
それに応じて高町も杖を構える。
ジュエルシードから少し離れた空中で、二人の戦いは始まった。

もう、あとはぶつかるだけだ。

「さあ、こっちも殺ろうか。」
「フェイトは俺が救ってみせる。
だからもうこの騒ぎから退いてくれないか。
フェイトも、フェイトの母親も、絶対に助けるから。」
「やっぱりお前は結末を知っているのか。」
「…ああ。」

この世界の元になったゲームやアニメを知ってると。

「なら何故…いや、いい。
この疑問はいらないな。ムダだ。」

体の奥底から、自分では制御できない感情が沸き上がってくる。
俺の目には、あいつが獲物にしか見えない。

「…もうダメだ、抑えきれない。
アハッ…アハハハハ……。」

あいつは殺せる、簡単に殺せる。
そう思った瞬間、なにもかもが支配された。
無意識に抑えてきたこの感情。

フェイトなんかどうでもいい。
今はただ、こいつを●したい。

指を一本一本折って、手の甲を踏み砕いて、足の骨を真っ二つにして、地面に思いっきり叩きつけて、内臓を潰して、顔をぐちゃぐちゃにして、目を抉って、脳をバラバラにして。

殺したくて殺したくて仕方がない。
未来永劫の苦痛を与え、希望を打ち砕いて絶望させたい。
狂ったように思考が働き、狂ったような思考にしかならない。
強い強い殺人衝動。
あの殺人鬼を殺してから数週間、我慢ができない。
「ーーーーーー！！」
奇しくも、フェイト達が交戦するのと、俺が飛びかかるのは同時だった。
だが、戦斧と杖、ナイフと聖剣が交差する直前、青い光が向こうから、そして白い光が俺らの間に現れた。
あっちは少年、こっちは青年が、双方の武器を止めた。
「ストップだ！　ここでの戦闘は危険すぎる！
時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。
詳しい事情を聞かせてもらおうか！」
少年はそう高々と宣言する。
逆に青年は穏やかにこう言った。
「時空管理局嘱託魔導師、ヴァン・アルノルトだ。
君たちも、剣をひいてもらえる？」
青白い肌、金髪碧眼のその男は、俺のナイフを拳銃型のデバイスで受け止めていて、竜の聖剣も同じだった。

なんでだろう。その瞳を見た途端、意識が朦朧としてきた。
殺人衝動も薄れる。
マズイ。魔眼か。

「フェイト…ジュエルシードを持って逃げろ…！！」

こちら側に高町がいたのが幸いだ。
気を失う前に、ロロのギアスを発動させる。
周囲の人間の思考を停止させるギアス。
その力はフェイト以外の人間全てを止めた。
しかし発動した時から止まる心臓。
それなりに広範囲、さらに人数も多い。
長くはもたない。

「でもっ…！」
「行けぇ！！　俺に構うなァ！」

すでに封印してあったジュエルシード、それを掴んだフェイトは、
アルフと共に森の奥へ消えた。
安心した俺は、心臓が止まった負担と謎の魔眼の相乗効果で気絶した。

「今…なにが…。」

せめて…竜だけは…殺…。

その21　MELTY　REASON（後書き）

さて問題。
ヴァン・アルノルトさんの能力はなんでしょーか。
正解はしばらく先。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0138w/

魔法世界の異能持ち

2011年12月25日01時22分発行